

近現代カンボジアの社会変動下におけるカルダモン利用の動態

—— 収穫現場の統率者、販売制度、保全活動をめぐる地域環境史 * ——

石橋 弘之**

Social Changes and Dynamics in Use of Cardamom in Cambodia: Environmental Local History on Harvest Leader, Marketing System and Conservation Activity in the Cardamom Mountains

ISHIBASHI Hiroyuki**

Abstract

Cardamom (*Amomum kravanh*) has been used as a medicinal plant, a food and as a source of revenue in the Cardamom Mountain region in south west Cambodia, from at least the late 19th century. Harvesting of this plant entailed a ceremony to open the season, conducted by a harvest leader (*dangkhwaw*), who took responsibility in leading the harvest group in harvest activities. Production of this plant was also controlled by the then French colonial government in order to secure state revenue by reforming the taxation system and organizing a marketing cooperative system managed by local administration which used a similar system in 1950s and 1960s.

However, the use of cardamom was interrupted in 1970s and 1980s due to civil war that broke out under the Pol Pot regime. Although its use and management restarted after the establishment of a new government in 1990s alongside the creation of protected forest in 2002 through conservation activities, the author has observed that its use has changed and diversified between both the northern and southern part of the central mountains. That is in the north, ceremony, harvest and selling is still practiced, whereas in the south, people don't practice ceremony and are inclined to refrain from harvest and selling.

This paper will explore how the use of cardamom differed and changed due to historical transitions and social and environmental conditions between the two research sites correlating it with the harvesting leader, marketing system and conservation activities. It then discusses factors effecting its continuous use.

The following two points were the core internal factors that supported the continuous use of cardamom in the northern part of the mountains. (1) A fundamental system for practicing harvest custom formed by interaction between characteristics of *dangkhwaw* (a. Commitment to on the ground activity, b. A hereditary role in transferring knowledge and experiences among kin, c. The adjustment of the harvesting period to collect well ripened fruits with a good market price) and the environmental setting of the area where cardamom was abundant. (2) The *dangkhwaw* and his family who managed this system reconstructed and maintained harvest customs even under conditions of rapid social change and historical transitions. In addition to this, (3) External intervention through the introduction of a marketing system and conservation activities that linked with the internal harvesting system, formed a system connecting both the inside and outside world of the community through maintaining conditions for selling the harvest.

Keywords: cardamom, the Cardamom Mountains, harvest leader, marketing system, conservation activity, continuation, environmental local history

キーワード: カルダモン, カルダモン山脈, 収穫現場の統率者, 販売制度, 保全活動, 利用の継続, 地域環境史

* この論文は2009年1月に上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻に提出した修士論文「カンボジアにおける地域社会と中央政府の関係から見た非木材林産物の利用変遷——カルダモン山脈の地域住民によるカルダモン利用の地域差に着目して」, および2009年11月14日に京都大学東南アジア研究所で開催された「次世代の地域研究」研究会, 第3回カンボジア特集研究会の発表内容に加筆, 修正したものである。

** 東京大学大学院農学生命科学研究科, Graduate School of Agricultural and Life Sciences/Faculty of Agriculture, The University of Tokyo, 1-1-1 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8657
e-mail: h_m_ishibashi@yahoo.co.jp.

I はじめに

1. 問題設定

カンボジア南西部に連なるカルダモン山脈は、その地名が表すように薬用カルダモン (*Amomum* spp.) がカンボジア国内で最も多く分布する地域とされる。ショウガ科の草本植物であるカルダモンは南アジアや東南アジアの各地に分布し、近年は地域住民の現金収入源や資源の持続的利用に繋がる非木材林産物としても注目されている [Aubertin 2004; Sharma *et al.* 2007]。¹⁾

カルダモン山脈では遅くとも 19 世紀末の仏植民地期よりカルダモンが収穫されてきた記録がある。この地域の山地民は収穫前に儀礼を開催し、収穫後に薬草、食材、現金収入源としてカルダモンを利用する一方で、中央政府は地域の特産品として徴税と販売制度の整備を通じてカルダモンの管理を行ってきた。しかし、1970 年代以降の内戦とポル・ポト政権の経験、そして 1990 年代以降の新政府発足後の森林政策や、保護林の設立にともないカルダモンの利用のあり方も変化してきた。

カンボジアでは 1980 年代以降も内戦が続けられたが、国内ではこの時期から国家と村落社会の両方において、1970 年代の政治的混乱からの社会再建に向けたとりくみが着手されてきた [天川 2001; 小林 2005; 高橋 2001]。

一方で、カルダモン山脈は 1980 年代以降もポル・ポト派の勢力圏内にあり、内戦が終結を迎えた 1990 年代末まで戦闘が続いた地域を含む。治安上の理由からも現地調査の機会が限られてきたこの地域において、近現代のカンボジアの社会変動下で住民が経験した変化や、内戦からの社会再建の動き、そして近年の保護林での保全活動を通じて、カルダモンの利用がどのように変化してきたのかは未だ明らかにされていない。

さらに、筆者が 2007 年から 2010 年にかけて行った現地調査で明らかになったのは、現在ではカルダモンの利用が変化しているだけでなく、その利用状況に山脈中央部の北部と南部の間で地域差が生じている事実であった。それは、北部では儀礼、収穫、販売が続けられているのに対して、南部では儀礼が中止され、収穫、販売を控える、もしくは中止する傾向が見られる点にある。では、近現代のカンボジアの社会変動の過程で、どのような要因がカルダモンの利用継続を左右してきたのだろうか。これを明らかにするには、過去におけるカルダモンの利用のあり方を理解した上で、変化と地域差が生じた経緯を捉える必要がある。

1) カルダモンの自生条件は、日陰となる樹木（直射日光に弱い）、高温多湿（適温 19–20℃）、年間約 100 日の降雨である [Aubertin 2004; Sharma *et al.* 2007]。カルダモン山脈の気温は 25–30℃、年間降雨量 3,000 mm 以上（カンボジア国内最大）である [Daltry 2002: 10]。

2. 先行研究の検討と本研究の視点

カルダモン山脈のカルダモンの利用に関する研究は、山脈へのアクセスの難しさや、近年まで実地調査が困難であったこともあり、研究の蓄積は限られている。

そこで、他地域での薬用カルダモンの利用に関する研究から、カンボジアの例の特徴を見ると、ラオス、東ヒマラヤを対象とした事例 [Aubertin 2004; Sharma, E. *et al.* 2000; Sharma, R. *et al.* 2007] では、現金収入源としての利用が検討されている。しかし、その利用の歴史的変化の分析は限られており、自家利用や、儀礼実施の事実も指摘されていない。²⁾ この点にカルダモン山脈でのカルダモンの利用の独自性を指摘しうる。

一方で、従来のカンボジア研究でのカルダモンの主な位置づけは、18～20世紀初頭の植民地前後を対象とする歴史研究や地誌の中でポーサット地方について記した箇所に見られる。ここでは、王族と王国周辺に居住する少数民族との交易・貢納関係を取り結ぶ特産品の一つとして、カルダモン山脈ではペアル (*Pear*)、ないしポー (*Pors/Pahrs*) という民族がカルダモンを貢納した点が言及される [Aymonier 1900: 77, 228; Forest 1980: 281-282, 314-415; IS 1906: 19-22, 60-64; Moura 1883: 12, 411-412; 北川 2006: 33-34; 高橋 1997: 49]。

これに対して、カルダモン山脈の地域社会について具体的に記録した植民地期以降の研究もわずかに存在する。例えば、1930年代のポーサット地方の地誌では、植民地期のカルダモンの販売制度の変遷を比較的詳しく説明しているが、実際に儀礼と収穫に関与した主体の記述は少ない [Morizon 1936]。

一方、カルダモンの儀礼と収穫の詳細な検討が含まれる研究には、カンボジア西部に居住するペアルを対象とした民族研究 [Baradat 1941]、1960年代の現地調査に基づき山脈の社会を包括的に捉えた基礎資料を提示した民族植物学研究がある [Martin 1971; 1976; 1997]。両研究では山地民のエスニシティに着目しつつ、儀礼と収穫を統率した役割が存在した点を指摘しているが、その反面、販売制度の説明は少ない。また、1960年代の民族誌は、山地民の民族起源を探るなかで、儀礼と13世紀の文化との連続性を安易に強調している点に問題がある [Martin.: 1976: 215-216; 1997: 65-66]。なぜなら、その主張を裏付けるための根拠として、周達観による13世紀の真臘国の滞在記『真臘風土記』を参照し、13世紀末に山地民がカルダモンを収穫していたのは現在のシアン・リアプ州にあるクーレン山であり、それはカルダモン山脈の民族ペアルの最初期の集団に間違いないと断定しているからである。たしかに、『真臘風土記』

2) ラオスでは過去50年にカルダモンが栽培されてきたとされるが、その経緯の説明は無く、1990年代以降の土地政策、森林政策の影響に議論の焦点が当てられ、その調査地では儀礼の実施、自家利用の事実が無い点が明示されている [Aubertin 2004]。東ヒマラヤでは調査地がインドに併合された1975年以前からカルダモンの収穫があったとする説明はあるものの、1970年代以降に現金収入源としての利用が増えた点を主に論じており、それ以前の時期の具体的な説明はなく、自家利用と儀礼の有無の事実も明示していない [Sharma, E. *et al.* 2000; Sharma, R. *et al.* 2007]。

には山地民がカルダモン（原文では「荳蔻」）を栽培していたとする記述はあるものの、その地名や山地民の言語など民族を特定できる情報は少ない〔周達観 1989: 36-38, 40-41〕。よって、カルダモンの利用の歴史的な連続性を考察するには更に慎重な検討を要する。

さらに、近現代のカンボジアの社会変動下でカルダモンの利用に変化と地域差が生じた背景を検討する上で、上記の先行研究には以下の課題点がある。

第一に、カルダモンが地域の特産品として売買されてきたことが所与の前提とされ、植民地政府がカルダモンに注目するに至った経緯を十分に論じていない。³⁾ これに関しては、従来の研究では検討が少なかった植民地期の法令・行政文書をもとに中央政府がカルダモンに商業的価値を見出し、徴税と販売制度を整備した経緯を再検討して販売の継続性を考察する手がかりとする必要がある。

第二に、儀礼と収穫現場の統率主体については祭司としての宗教的役割に主眼が置かれているが、カルダモンの利用継続性を捉えるには、資源の利用と管理に関わる主要主体という観点から、その役割の特質を捉えなおす必要がある。さらに、実際に地域ごとに収穫活動に影響をもっていたのは誰であったのかにも着目した検討が必要となる。

第三に、本論の調査地の保護林ではカルダモンを対象とする保全活動が実施されているが、先行研究の対象時期が戦前に限られているため、1970年代前後の社会変動の歴史的な流れの中で、保護林設立後にカルダモンの利用が再開された経緯や、保全活動がその利用に与えた影響を通時的に検討した研究がない点である。⁴⁾

第四に、対象地がポーサット州の山脈中央部から北方の地域に偏重している。植民地期以来の記録や先行研究には、ポーサット以外でも収穫があったとする記録はあるものの、各地域の具体的な利用は検討されていない。⁵⁾ 一方で、植民地期には収穫地が東と西に区分されていたが、これに該当する地域もポーサット州内にある〔Forest 1980: 343; Morizon 1936: 83; IS 1906: 21-22〕。また、1960年代に山脈一帯を調査したマルタンは山脈中央南部のコッ・コン州も訪れているが、各地域の比較検討はしていない〔Martin 1997〕。ポーサット州が注目されてきた理由には、この地域が品質の良いカルダモンを豊富に産出するとされてきたことも背景にある〔Aymonier 1900: 28; IS 1906: 19; Moura 1883: 12〕。この点は同じ山脈内でもカルダモンの分布

-
- 3) 植民地期の記録にカルダモンの交易記録があることから、それ以前の時期よりカルダモンは交易品として注目されていたと思われるが、山脈産のカルダモンが歴史上初めて注目された経緯は現時点では史資料の制約が大きく不明な点が多い。
 - 4) 近年はカンボジア人学生による保護林での調査に基づいた研究として、NGOによるワニの保全活動を通じた地域への支援方針を比較検討した修士論文〔Oum 2009〕、地域住民の土着知識が生物多様性保全に及ぼす効果を検討した卒業論文〔Thuon *et al.* 2009〕がある。
 - 5) ポーサット南方のトゥボン（Thpong）地方でもカルダモンの収穫があったが、品質はポーサット産に比べ低かった。また、当時タイ領でありポーサット北西にあったパッ・ドムボン地方ではタイ王にカルダモンが貢納されていた〔Aymonier 1900: 230; 1901: 280〕。

域は異なっていた可能性を示唆する。

しかし、筆者の現地調査によれば南部に相当するコッ・コン州でも収穫・儀礼・販売が過去に行われていたことが伝えられていた。従来の研究で南部での利用が検討されてこなかった理由は明らかではないが、それが現在の利用状況の地域差と関連するものなのかどうかを捉えるには、北部と南部の両地域に着目する必要がある。

山脈の地域社会は、必ずしも北部と南部という二つの地域に一般化しえないであろう。しかし、両地域でカルダモンの利用に変化と相違が生じた背景を理解するうえで、北部と南部という区分を用いることは、「地域環境史」[宮内 2009: 126-128]を理解する観点からも有効であると思われる。なぜなら、宮内は「地域環境史」を地域や時代に応じて変化する自然と人間の関係や、自然環境の利用に関わる社会的しくみの歴史の総体を表すものとし、これらの動態と多様性を理解する重要性を述べているからである [同所]。

そこで、本論では地域環境史を、北部と南部の自然環境（カルダモンの分布）の相違、歴史的経緯や社会・政治状況の相違、それに依って動態的に変化するカルダモンと住民の関係や、カルダモンを介した社会のありようを表すものとする。そして、これを理解する具体的な方法として、北部と南部で儀礼、収穫、販売の実施状況に相違がある現状を念頭に置き、そこに収穫現場の統率者、販売制度、保全活動がどのように作用したのかに着目しつつ、植民地期から現代までの北部と南部の動向を地域別に整理する。

以上を踏まえた本稿の目的は、近現代のカンボジアの社会変動の過程でカルダモンの利用のあり方に変化と地域差が生じた歴史的・社会的背景を、カルダモンをめぐる地域環境史の動態から解明し、カルダモンの利用継続を左右してきた要因を考察することである。

カルダモンの利用は山脈の住民の生業や慣習をなす一部であり、これに限定することは山脈の地域社会が経験した変化の全体像への理解には必ずしも直結しない。だが、カルダモンが歴史的に地域の特産物として利用されてきたこともまた重要な事実である。したがって、この植物を切り口とすることで、カルダモン山脈の社会復興の動態や、そこでの資源の利用と管理の変容動態の理解に向けた第一歩にも繋がるものと考えられる。

以下では、II章で調査地のカルダモンの利用状況の地域差の現状を述べ、III章で19世紀末～1960年代に販売制度が整備された経緯と収穫現場の統率役の特質について、カルダモンの分布域にも留意して検討する。IV章では1970～1980年代の内戦とポル・ポト政権期の経験がカルダモンの利用に与えた影響と戦時中に収穫の統率者の存在に地域差が生じた背景を述べる。V章で1990～2000年代に新政府発足後の森林政策と保護林の保全活動のもとで利用状況の変化と地域差が生じた経緯を述べ、VI章で考察を整理し、VII章で結論を導く。

II 調査地概要 —— カルダモン利用の現状

調査地はカルダモン山脈中央部の北部と南部に位置する。北部はポーサット州ヴィアル・ヴェーン郡オー・サオム区(以下OS区)、南部はコッ・コン州トゥモー・バーン郡ルッセイ・チュルム区(以下RC区)とタ・タイ・ルー区(以下TTL区)である(図1)。⁶⁾ いずれの地域も現在は農林水産省森林局が管轄する中央カルダモン保護林(401,313ha)の内外にある。保護林の保全活動は、森林局、国際環境NGOのConservation International(CI)、Fauna and Flora International(FFI)が担当する。CIは主に保護林全般の運営に関わる法施行・違法活動の摘発等の活動を行い、FFIはOS区の湿原に生息する絶滅危惧種のシャムワニの保全活動を行っている。

この地域に暮らす山地民は民族名を聞くとチョーン(chong)と自称する人が多く、⁷⁾ 言語学

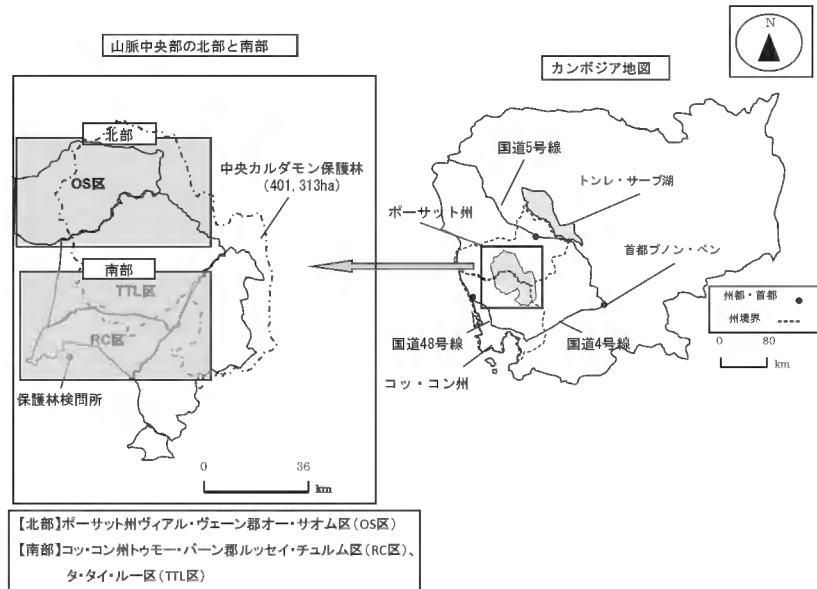


図1 調査地の位置

出所: 筆者作成

6) 現地調査は断続的な訪問により実施した。滞在期間は北部で合計70日間(2008年3月, 2009年8-9月, 2010年1-2月, 6-7月), 南部で合計38日間(2007年8月, 2008年2月・8月, 2009年8月, 2010年2月)である。調査地では山地民, 低地からの移住者, 森林局およびNGO職員への聞き取りと参与観察を行い, 補足的な聞き取りを首都プノン・ペンのNGO事務所で行った。

7) ただし, 住民の民族意識には個人差や地域差がある。また, OS区には同じモン・クメール系ベアル語で民族名をポーと自称・他称される住民を含む家が2家族ある。

上はモン・クメール系ペアル語派に属する [Isara 2002]。ただし、山脈を出身とする山地民⁸⁾でも 1970 年代から 1990 年代にかけて戦乱を逃れる中で現在の居住地に移住してきた人も多い。最近になり低地から移住して来た住民もいるが、家族数⁹⁾の割合は RC 区を除いて山地民の方が移住者よりも多い (表 1)。

住民の生業は畑と水田による農業が中心だが、森林産物の利用、漁業、商店経営、保護林の保全活動への参加、行政や学校教員などの仕事との兼業もある。

調査地には複数種のカルダモンが自生する (表 2)。収穫されるのはクメール語でクロヴァー

表 1 調査地の住民構成 (2009 年)

山脈中央部内の地理範囲	北部		南部	
	行政区	OS 区	RC 区	TTL 区
家族数 (人口)		264 家族 (1,075 人)	210 家族 (864 人)	128 家族 (537 人)
山地民の家族数の割合		8 割	2 割	9 割
移住者の家族数の割合		2 割	8 割	1 割

出所：OS 区、TTL 区は行政区長、RC 区は区役員および元区長への聞き取りより筆者作成 (2009 年調査)。

注：OS 区行政の助役担当への聞き取りでは 2009 年 7 月 19 日付の人口は 266 家族、人口 1,088 人であり区長への聞き取りと若干の誤差があった (2010 年 2 月調査時に確認)。

表 2 カルダモンの種類と用途

クメール語呼称	クロヴァーニュ	クラカオ	クラカイ
学名	<i>Amomum kravanh</i>	諸説あり	不明
薬用	解熱剤、消化剤、抗マラリア薬、風邪薬、 強壯剤、女性の出産後の薬、 プレン・コラー (気付け薬、嗅ぎ薬)、めまい薬		
食材	サムロー (スープ)、 ブラホック (調味料) の材料、お茶の葉 食後の口直し (ビンロウと混ぜて噛む)	—	利用の対象外
販売	1 級品	2 級品	

出所：現地調査、[Ironsides *et al.* 2002; Martin 1971; 1997; 坂本 2001] をもとに筆者作成。

注 1：クロヴァーニュの学名はクメール語呼称に由来する [ギューヨ 1987; 119]。

注 2：クラカオの学名は *Amomum echinosphaera* *A. elephantorum*, *Elletaria cardamomum* syn. *Amomum repens* 等諸説ある。

注 3：クラカオは呼吸器系疾患の治療効果もある (<http://www.fairwild.org/activities/>)。

最終閲覧日 2010 年 5 月 19 日。

注 4：プレン・コラーは薄荷油を主成分とする薬 [坂本 2001]。

- 8) 本稿で山地民とはクメール語で「先住民族 (*cwonchiet daeum*)」「少数民族 (*cwonchiet phiek tec*)」と呼ばれる、または文献資料でモン・クメール系ペアル語派とされるカルダモン山脈出身の住民を指す。
- 9) 本稿では一般に「家族」と翻訳されるクメール語「クルウオーサー (*kruosa*)」を家族数の単位に用いた。行政区役員に確認した家族数や、NGO 報告書で用いられる “households” もこの語に基づく。



写真1 カルダモンの葉



写真2 匍匐枝



写真3 プノン・ペンの市場で市販される実

ニュ (*kravanh*) および、クラカオ (*krakao*) と呼ばれる種類である。歴史的にはクロヴァーニュが1級品、クラカオは2級品として販売されてきた。¹⁰⁾ 山地民がカルダモンについて説明する際に言及するのも主にクロヴァーニュの方であり、本論が対象とするのもこの種類である(写真1)。その具体的な用法には、薬用利用の場合は、解熱剤、抗マラリア薬、消化剤等に使用われ、薬用効能は地表に生える匍匐枝(写真2)の中に成る実と種の揮発性油と精油に含まれる [Lavit 2004: 45-46]。食材としては、サムロー(スープ)、プラホック(調味料)、お茶にも使われる。そして、乾燥させた実が販売される(写真3)。

山脈中央部の北部と南部におけるカルダモンの利用状況には以下の点で地域差がある。

1. 儀礼と収穫

北部のOS区では現在もカルダモンの実が成熟する7月になると儀礼が開催される。儀礼の開催後に収穫が解禁されるが、解禁前の実の採取は「盗み (*luoic*)」とみなされる慣習がある。儀礼はOS区の守護霊 (*neak ta*) S氏の祠で開催される。S氏は生前に儀礼と収穫の統率を行い、1993年頃に亡くなった後に守護霊として祀られるようになったと伝えられる(写真4, 5)。S氏の祠は、4つの行政村、CL村、K村、OS村、KCR村のうち、CL村にある。ただし、CL村、K村、OS村の3村は主要道路沿いに家屋が隣接して並び、儀礼は3村合同で行われる。¹¹⁾

南部では、かつては収穫前に儀礼が行われたが現在は実施されていない。TTL区住民によると「以前は毎日のようにカルダモンが採取されていたが、最近は取り過ぎないように呼びかけている。カルダモンを失うことは文化を失うのと同じ」という。また、RC区住民は「カルダモンは最も重要。薬を作ることもできるし、健康にもいいから。(しかし)現在は採取しない。畑

10) 19世紀末の1ピクル (picul=約60kg) 当たりの価格はクロヴァーニュ 150フラン、クラカオ 65フラン [ANC RSC 34240]。1960年代末の価格はクロヴァーニュ 2,000リエル/kg、クラカオ 50リエル/kg [Martin 1997: 242]。

11) KCR村は他3村から南東約5km離れた湿原にあり、儀礼は別々に行うが、儀礼の前には各村が事前に連絡し合う。



写真4 S氏の祠



写真5 S氏の像

をするために森が切りつくされ、少ししかカルダモンが残っていないから」という。

2. 販売

北部では、収穫したカルダモンの使い道を聞くと「全て売る」「自家用に残すのは少量」との答えがあり、販売が積極的に行われている。2008年の実績では100家族以上が収穫に参加し、合計約2,000 kgが販売され、1 kgあたりの価格は16,000～20,000 リエル、すなわち約4～5米ドル(以下ドル)¹²⁾であった。1家族当たりの採取量は約5～50 kg以上であり、金額にして20～250ドル以上に相当する。実の旬の時期は7～8月に限られており、短期間で高収入を得られる現金収入源として利用されている。¹³⁾

一方で南部ではカルダモンを収穫する家庭自体が少なく、現在も収穫する山地民の家庭でも自家用の伝統薬を作る際に少量を採取する程度である。2007年頃まではRC区の区長が住民から実を買い取っていたが、それも現在は行われていない。また、2008年の販売状況についてRC区では「現在は採取しない。理由は売れなくなったから」、TTL区では「1993年、2005年は販売があったが、2008年は販売されていない」という声があった。

3. カルダモンの森の保全活動

北部と南部では保護林の保全活動の一つとして、森林局とNGOが行政区の土地利用計画を支援しており、カルダモンが分布する林地の区画策定も行われている。¹⁴⁾しかし、カルダモンの森は北部の方が南部よりも広く、北部は4,988 ha、南部(RC区)は560 haである。

12) 2008年12月末の為替は1ドル=4,077 リエル [アジア経済研究所 2009]。カンボジアでは外貨両替の規制の弱さから自国通貨のリエルだけでなく米ドルも広く流通する [矢倉 2008: 60]。

13) 参考として1990年代半ばから急成長してきたカンボジア縫製産業の2008年4月以降の工場働者の最低賃金は月給56ドルである [アジア経済研究所 2009]。

14) 実際には区画された範囲外にもカルダモンは分布する。

以上のように北部と南部でカルダモンの利用と保全活動が行われている点は共通するが、儀礼、収穫、販売の実施状況は異なり、カルダモンの森の広さも異なる。この現状を念頭に入れ、以下では 19 世紀末から 2000 年代までの動向を概観しながらカルダモンの利用に変化と地域差が生じた歴史的経緯を検討する。

III 19 世紀末～1960 年代——販売制度の整備、収穫現場の統率者の役割

1. 仏植民地政府のカルダモンへの関心

1863 年、フランスがカンボジアを保護国化した当初の目的の一つはメコン川を利用した中国市場の獲得であり、保護国化の際にフランスは木材と鉱石を輸出するための森林伐採権と鉱山開発権を獲得した [天川 2001: 27-28; 岡田 2006: 174]。ただし、植民地期当初の森林政策は税の徴収と行政官を派遣しての現地調査が中心であった [Cleary 2005: 263]。

カンボジアでも 1898 年 6 月にフランス人行政官ルソー (Rousseau) がポーサット地方の山脈でカルダモンの収穫地の現地調査をした。その報告書には現地調査の背景、旧体制下の身分制と現物貢納制度の概要、そして植民地政府がカルダモンの徴税と販売制度を整備した経緯が記されている [ANC RSC 34240: 以下, ルソー報告書]。

ルソー報告書によると、植民地政府がカルダモンに関心をもったのは、その薬用効果に見出されていた商業的価値にあった。この点は、カルダモンが中国人の間で高い需要があり、カンボジアにおける重要交易品として、植民地行政が収入源を得るために重視していたとする記述にも示されている。

カルダモンが他の林産物よりも重視された背景には、その資源の性質も関連していた。カルダモンは発芽から実の成熟まで約 3 年を要するが、その後は毎年収穫が可能である。¹⁵⁾ ルソーの報告書にも中国人がカルダモンの繁殖性に注目しており、「何の手入れをしなくても森の中に自生し、……世話も開花から成熟までの見張りというもののみ」との記述がある。また、19 世紀に植民地官吏としてインドシナを調査したエイモニエもポーサットのカルダモンは、ほとんど手が加わらない状態で産出され、その成長を妨げる草を取り除く他に手入れはされないとしている [Aymonier 1900: 228]。このように、最低限の手入れで、再生しやすく、生産しやすい、という粗放的な管理で生産可能な点が植民地政府の関心を引いたと考えられる。¹⁶⁾

植民地政府は以上のような関心のもとカルダモンを重要な輸出品の一つとしてきた。ただ、

15) 森林局職員、OS 区 40 代男性への聞き取り。

16) ルソーの報告書によると当時は樹脂や沈香も収穫されており、沈香はカルダモンよりも高値であったが、報告書の記述の大半はカルダモンが占めている。OS 区 40 代男性によると沈香を産出する樹木は成長して収穫可能になるまで 10 年以上かかるという。

時期により輸出上の重要度は変化した。例えば、1901年のカンボジアでカルダモンは輸出品目第6位にあったが1914年には33位に下落した。これは、仏領インドシナの輸出品全体の中でカンボジア産品の重要度が下がったこと、近代薬が普及した可能性によるものとされる[Forest 1980: 281-282]。そして、1914年11月25日付王令では、従来はカルダモンの売上に課されていた徴税が中止された[ANC RSC 364]。しかし、その後に山脈を訪れた理事官は1918年付の報告書で、カルダモンが高価格で売買されていることを指摘し、課税を再開する必要性を提言した[ANC RSC 11529]。こうした背景もあり、カルダモンの輸出量は時期により変動したが、1913年から1940年の間に毎年平均475トン¹⁷⁾が主に香港¹⁸⁾に輸出されてきた(図2)。

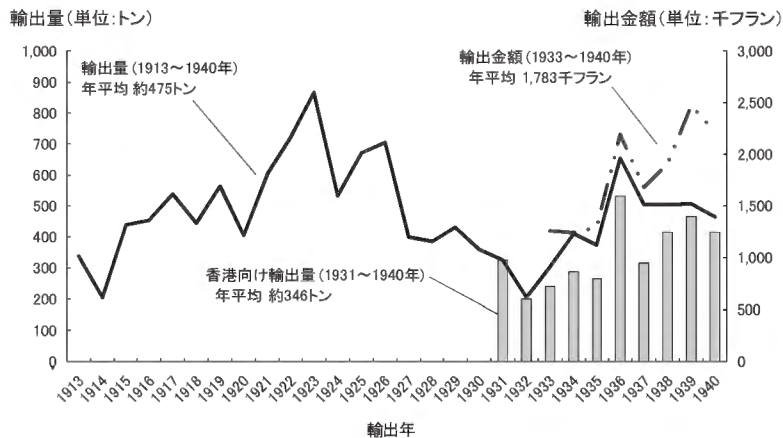


図2 仏領インドシナのカルダモン輸出推移(1913～1940年)

出所：仏領インドシナ年鑑 [IEO: 1927a; 1927b: 1931; 1933; 1935; 1937; 1938; 1939; 1942] をもとに筆者作成。

注1：表の数値は“Principaux produits de l’agriculture, de l’élevage, des forêts et de la pêche exportés,” “Commerce spécial. Marchandises exportées en poids et en valeur,” “Commerce spécial. Quantités exportées des principales marchandises, selon la destination et les pays de sortie” より、Amomes et cardamomes の項目から抜粋したもの。

注2：1913～1932年の仏領インドシナの輸出金額、1913～1930年の香港向け輸出量の数値は不明。

17) 輸出量はラオス産のものも含まれた可能性がある。例えば1903年の仏領インドシナのカルダモン輸出量228トンのうち135.5トンはカンボジア産、残りはラオス産であった [Forest 1980: 281]。植民地期のラオスではボロヴェン高原の北、Ban Dan Sia村で産出されたカルダモンをSédonに運送後、船でプノン・ペンに輸送し、中国、カンボジア国内、安南に輸出した記録がある(総合地球環境学研究所プロジェクト4-2アジア・モンスーン地域における地域生態史の総合的研究森林・農業班、フランス海外県公文書137番“Le plateau des Bolovens” [http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/fawg/] 最終閲覧日2010年5月18日)

18) 香港に輸出されたものは胸焼け、吐き気、消化不良、肺病、衰弱、悪寒、目のかすみ、頭痛、リウマチ、二日酔い等の治療、調味料、強壮剤、酒の成分に使われた。中国では主に広東省で蒸留された精油がガラス瓶に詰められ国内の市場で売られた [Watson 1941: 83, 297-299]。

では、カルダモンから収入を得るための制度はどのように整備されたのだろうか。以下、1897 年までの旧体制下のカルダモンの収穫体制を概観した上で、19 世紀末以降に植民地政府が販売制度を整備した経緯を述べる。

2. 1897 年以前——旧体制下の身分制と現物貢納税

1897 年までは身分制に基づく現物貢納制度のもとでカルダモンの徴税が行われていた。ルソー報告書によると、この制度下で王に所属する世襲身分の一つであったポル (*Pol*) は、カルダモン、沈香、雌黄、樹脂等の林産物を収穫して国王に貢納する義務があった (表 3)。

ポルは行政上、「東のポル (*Pols de l'Est*)」と「西のポル (*Pols de l'Ouest*)」に分けられ、収穫地も東と西の「カルダモン園 (*Jardins des cardamoms*)」に分けられていた [ルソー報告書; ANC RSC 11529; IS 1906: 22; Morizon 1936: 83, 85]。東西の区分の範囲は、東はポーサット州都付近、西はタイ国境付近に相当したが、東西の区分に含まれる地名が史料により一致しない例や、地図上の位置が判然としない地名も含まれるため、東西の境界を正確に把握するのは難しい。ただし、おおよその位置を特定できる地名から判断すると、山脈中央部から見て北西から南東の地域を境に東と西に分けていたようである (図 3)。

カルダモンの収穫地は「庭・園」を意味するクメール語、「スーオン (*Suon*)」と呼ばれ、植民地行政官も「カルダモン園」と表現していたが、実際の収穫地は森の暗がりの片隅にあり、

表 3 カルダモンの身分別貢納量 (1897 年 6 月 1 日付政令)

身分・役職名	年齢・条件	貢納量	
		リーヴル	キロ (kg) 換算
ポル (<i>pol</i>)	18-20 歳	5	2.5
	21-50 歳	20	10
	51-59 歳	15	7.5
	身障者	5	2.5
	60 歳以上	5	2.5
ポン・ポル (<i>pon-pol</i>)	21-50 歳	10	5
	51-59 歳	8	4
	身障者	5	2.5
	60 歳以上	5	2.5
コン・コイ (<i>kon-koi</i>)	—	5	2.5
コムロ・エン・クヴェーン (<i>Komlos-ên-Khvêng</i>), プレイ・ンギア (<i>prey-ngéa</i>)	年齢に関わらず生産量の 半分の収穫を貢納		

出所: [ANC RSC 25729] もとに筆者作成。

注 1: 1 リーヴル (*livre*) = 500 グラム

注 2: 身障者は年齢に関わらず収穫に従事可能な者、60 歳以上は収穫に従事可能な者に限定。

注 3: コン・コイ (カルダモンの森の管理担当の補助役)

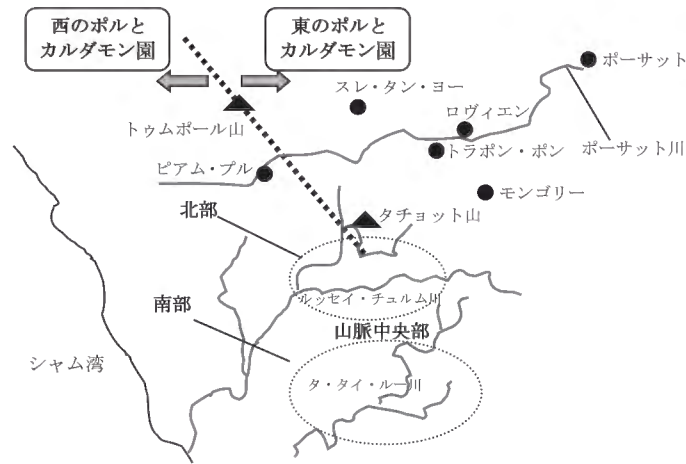


図3 東と西のボル、カルダモン園の境界および山脈中央部（北部・南部）の位置関係

出所：[ルソー報告書；ANC RSC 11529；IS 1906: 22；Martin 1997] を参考に筆者作成。

注1：図中の地名はおおよその位置を把握できたもの。その他の位置の特定が難しい地名は省略した。

注2：トゥムポール山の東西の区分は文献により異なるが、参照した文献で示された地理上の位置を踏まえ東西の境界にある地点として図示した。

外見上はむしろ野生の低木林¹⁹⁾のようであったという [ルソー報告書；IS 1906: 21]。

東と西のボルには、それぞれに土着民の長であったチャン・ヴァン (*Chang-Vang*) という役職が年貢の徴収を統括し、貢納品を王に配送する仕事を担当した。²⁰⁾ さらに、チャン・ヴァンの職務を補佐する代官として、クロラバンチー (*Kralabangki*)、ネアイ・ロウング (*Neai Rong*)、ドンカウ (*Dangkau*) などの役職が各地区で階層化され、貢納物の計量や荷造り等の実務を担当した [ルソー報告書；Forest 1980: 343；IS 1906: 62-63；Morizon 1936: 83]。

カルダモンの販売は旧体制下でも行われていたが、1897年6月1日付の閣僚評議会の政令 [ANC RSC 25279: 以下 1897 年政令] によると、チャン・ヴァンが徴収した収穫物はボーサッ

19) カルダモンが自生する場所を探すには絡み合う蔓や、刺のある籐を苦労してかきわけながら進まなければならなかった [IS 1906: 21]。また、インドシナのカンボジアのカルダモンは自生しているものと、栽培されているものがあり、本式のプランテーションもあったが、栽培とは名ばかりで自生する株の成長を見守り維持するだけの場合もあった [ギユイヨ 1987: 119-120]。少なくとも 19 世紀末時には栽培による品種改良や収穫高を増やす試みが無かった点をルソーは収穫地の監視担当者を確認した旨を記録している。

20) ルソー報告書によると貢納品を徴収する過程では役人による天引きが行われ、最終的に王に届けられる頃には、かなりの量が減少していた。これは、王族の領地の官吏や知事が年貢を徴収する一方で、徴収分の一部を各自の取り分にできた点も関連すると思われる [Aymonier 1900: 77]。

ト理事官府に移送後、²¹⁾ プノン・ベンの王国国庫に配達されるか、または目録局 (Bureau des Rôles)²²⁾ のもとで競売にかけられた。

このように、カルダモンの販売利益は国庫に属したが、一方で収穫者には貢納の引換えに自家消費用の粳米²³⁾が与えられた。したがって、旧体制下ではカルダモンの収穫者自身が販売により利益を得る機会は制限されていたと考えられる。

3. 徴税・販売制度の整備

1) 19 世紀末の制度改革①—— 現物貢納税の廃止から販売組合の設立へ

19 世紀末に入るとカルダモンの徴税と販売制度は大幅に改革される。その背景と経緯はルソー報告書、1897 年政令、1898 年 12 月 30 日付の王令 [ANC RSC 25729: 以下 1898 年王令] から確認できる (表 4)。

例えば、1898 年王令では身分制度と現物貢納税を廃止する旨が記され、これに代わる徴税方式が規定された。この税制改革の過程でルソーはカルダモンの収穫地で収穫者と新しい徴税方法を話し合い、その際に現場での売買にあたり中国商人と価格交渉を有利に進める必要性を検討した。その結果、地方行政が販売を代行する組合を設置し、売上から税を控除した金額を収穫者の出資量に応じて配分する販売・徴税制度が新たに制定された。

ルソー報告書によると、徴税方式が変更された背景の一つには、1891 年の財務管理体制の引

表 4 19 世紀末のカルダモンの制度改革の動き

年 月	出来事
1891 年	旧体制からの財務管理体制の引継ぎ
1897 年 6 月	閣僚評議会の政令：カルダモンの収穫を担当する身分と現物貢納税の規定
7 月	インドシナ総督による身分制度の廃止宣言
1898 年 6 月	行政官ルソーによるポーサット地方、カルダモン収穫地の現地調査 →旧身分の収穫者に身分制廃止を伝達、新しい徴税方式を協議
12 月	王令：現物貢納税を廃止、新徴税制度を規定

出所：[ANC RSC 34240; 25729] をもとに筆者作成。

21) ルソー報告書は、ボルが運搬したカルダモンの集積地の地名にセネン・プラ (Seneng Pras) を挙げ、そこではチャン・ヴァンを始め収穫を監督する全ての長が召集され、収穫された実を受け取り、年貢を計量したという。また、ロヴィエン (Rovieng) も東の収穫地の重要拠点であり中国商人が沈香、カルダモン、雌黄の樹脂、沈香等を買取りに来ていた [ANC RSC 11541]。20 世紀以降はポーサット州都近くのリエチ (Leach) でも収穫物が集荷された [Morizon 1936: 90]。

22) 徴税の際は収穫者に受領証が渡され、徴税対象者の目録作成が規定されていた (1897 年政令第 5 条)。

23) ボルにはポーサット州で徴税された粳米 10 袋分が各自付与された (1897 年政令第 3 条)。また、ボルはカルダモン等の貢納義務を負う代わりに、国内の農民に課せられたその他の税は免税された [Forest 1980: 342-343]。

継ぎ後、ポル身分長への給与支給方式がコメの現物支給から、銀貨を支給する方式に変更されたため、政府の銀支出が増加して財政難を招いたという事情があった。そのため、身分制度の廃止後もカルダモンの収穫者から税を徴収して政府財源を維持する必要が生じ、この対応策を検討する任務を受けてルソーは現地調査を行ったのである。

2) 1950～60年代——販売組合の踏襲

1950～60年代も植民地期と同様の販売制度が踏襲された。1953年にフランスから独立したカンボジア政府は税収難にあり、1956年に始まった2カ年計画では財源を補う取り組みの一つとして王国協同組合が設立された [Steinberg 1959: 185-186]。

カルダモン山脈でも1956年に国営の組合が設立され、中国人商人の購入為替よりも高額で林産物を直接購入することで、それまで生産物の流通を担っていた中国人を介さずに利益を確保する取り組みがなされた。この組合は郡長が組織し、組合がカルダモンを買い上げた後に住民が代金を回収した [Ironsides *et al.* 2002: 6; Martin 1997: 239]。

3) 販売制度が地域社会に与えた影響

以上のように、19世紀末から1960年代までのカルダモンの販売制度は、国の財源確保を目的に整備され、その特徴は地方行政が仲介する組合のもと商人との価格交渉を有利に行い住民に利益を還元するという仕組みをもっていた。

このことは、販売制度が整備された結果、山脈の地域社会で、農業のための畜牛や水牛の購入機会をもたらしたとするルソー報告書にも示されている。また、かつては現物貢納税により利用機会が制限されていたが、制度改革後は収穫した実を葉として取って置けるようになったことを回顧した住民への聞き取り記録もある [Martin 1997: 73]。こうして、制度改革を経て住民がカルダモンを現金収入源として利用する機会が増えたと考えられる。²⁴⁾

販売制度の整備とともに、生産量を増やす活動も積極的に行われるようになった。例えば、ポーサット州ではカルダモンの生産量が1900年から1904年の間に約4トンから約10トンに増えた(表5)。この時期には土着民が既存のカルダモン園の近くに幼苗を移植して収穫地を拡張する試みもなされ、²⁵⁾ これに対する行政の支援もあった [IS 1906: 22]。このように、販売制

24) ただし、カルダモンを現金の代用として米や魚などの食糧を購入する住民もおり、こうした住民を相手に外来の高利貸し業者が住民の現金獲得機会を阻害した問題や、カルダモンの花の盗みが生じるなど販売制度の運営には課題もあった。この状況を改善するために違法活動の取締り強化や、地域外から収穫地に往来する者への通行許可証の発行を厳格化する対応もなされた [Morizon 1936: 88-89]。

25) モンゴリー(図3)では10,000本、トラボン・ボン(図3)では10,000本の幼苗が植えられた [IS 1906: 22]。トゥムポール山(図3)でも1910年代に栽培が試みられたが野生ゾウに荒らされ失敗した [ANC RSC 11529]。

表 5 ポーサット州のカルダモン生産量 (1900-04 年)

生産年	1900 年	1901 年	1902 年	1903 年	1904 年
ピクル (picul)	73	106	115	76	168
kg 換算	4,380	6,360	6,900	4,560	10,080

出所：[IS 1906: 22] をもとに筆者作成。

注：生産量の数値はルソー報告書を参考に 1 ピクル = 60 kg で計算。

度の整備により、従来の野生に近い状態での利用に加え、より栽培を意識した利用も行われるようになった。

以上のような経緯でカルダモンの販売制度は整備され、それとともに地域社会におけるカルダモンの利用も変化してきた。しかし、植民地期の制度改革は収穫に関与した管理役職の変更にも及ぶものであった。

4. 収穫現場の統率役職の変化と存続

1) 19 世紀末の制度改革②——身分制廃止後のカルダモンの管理役職の変化

では、カルダモンの管理役職はどのように変更されたのだろうか。これを理解するために、19 世紀末の身分制の廃止に着目したい。

ここで、身分制とカルダモン収穫の関係を再確認しておく。1897 年以前の旧体制下では、現物貢納を義務づけられたボルが東西の収穫地に割り振られ、東西の収穫地ではチャン・ヴァンを頂点とする体制のもと、その補佐役を担当した各役職が定められていた。

しかし、これらの役職も 19 世紀末の身分制廃止後には一新された。このことは、カルダモンの徴税方法を規定した文書に記された管理役職名が、1897 年以前と 1898 年以降の文書では明らかに異なることからわかる (表 6, 7)。その違いとは、1897 年政令で規定された役職名が、1898 年王令以降の文書には記載がなく、その代わりに、植民地政府が 19 世紀末以降に新設した地方行政役職が記されている点である。

同様に、ルソーがカルダモンの収穫地を訪れた時にも、かつてのボルに身分制度の廃止を通知した際に、住民を召集して地方行政の役員に、バラート (*balat*)、メー・スロック (*mé sroc*)、チュムトップ (*chumtups*) を新しく選ぶ選挙が行われた。この他にも、チャン・ヴァンの役職とともに東西の収穫地の区分も廃止された [ルソー報告書: ANC RSC 11529]。

植民地政府が身分制を廃止し、カルダモンの管理役職を変更した狙いはどこにあったのだろうか。これに関連すると考えられるのが、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、植民地政府が行政機構の再編を通じて、旧体制の地方官僚と地域社会の人的紐帯関係を分断し植民地支配体制を強化する意図があったとする指摘である [高橋 2001: 73-80]。つまり、植民地政府は旧体制下のカルダモンの管理役職を廃止し、選挙で選ばれた地方行政役職を新たな管理役職とすること

表 6 1897 年以前——旧体制下のカルダモン管理役職

役職名	職務内容	
上級官吏	知事 (Gouverneur)	<ul style="list-style-type: none"> ・カルダモンの現物貢納の特別監督、免税の許可 ・カルダモンの徴税完了を知らせる通知文の発行 ・チャン・ヴァンを担当する候補者の推薦 ・徴収したカルダモンの目録への署名
	チャン・ヴァン (Chang Veng)	<ul style="list-style-type: none"> ・東西のカルダモンの森の監督 (Directeur), 東西各 1 名 ・貢納用のカルダモンの徴収, 王への配達 ・徴収したカルダモンの受領証への署名 (捺印) ・徴収したカルダモンの目録への署名
	役割名称なし	カルダモンの森の見張りの長 (chef de poste de surveillance)
下級官吏 (subalternes)	オーグルオン (Ok Luongs)	カルダモンの森の見張り カルダモンの計量・徴収 チャン・ヴァンの補佐
	クラバンチー (Krala banhchi)	
	ドムルオッ (domruoch)	
	クヴェーン (khveng)	
	ドンカウ (Dangkau) / ドンカウ・ネアック・ター (dangkhaou néac ta)	
ネアイ・ロウング (Néai-Rongs)		

出所：[ANC RSC 25729; 34240] をもとに筆者作成。

で、旧体制下の管理役職の影響力を断ち切り、カルダモンの生産体制をも支配下に置こうとしたのではないだろうか。

しかし、仮にそうした意図が植民地政府にあったとしても、制度の規定内容と実際の運営が一致していたかどうかを判断するには、現場の実態を把握し、実際に収穫地の現場統率を誰が担ったのかを検討する必要がある。

2) 収穫現場の実態に見る植民地管理体制の限界

植民地政府が 19 世紀末に定めた制度が必ずしも規定どおりに実施されなかったことは、20 世紀以降に山脈を訪れた理事官の 1918 年付けの報告書にも見られる。それによると、山脈にある遠隔地の監督は難航し、1907 年を最後に山脈の村落を訪問したフランス人行政官はなく、旧体制の東西区分の廃止後も、各村はかつての収穫地で収穫する権利を維持していたという。また、旧体制下ではチャン・ヴァンが収穫日の決定権をもっていたが、その際には事前に村の祭司 (sorcier) と相談した後に収穫日を決めていたこと、そして旧体制の廃止後には住民が自分

表 7 1898 年以降——植民地政府設立の地方行政役職によるカルダモンの管理職務

役職名	職務内容
理事官 (Résident)	<ul style="list-style-type: none"> ・一般目録作成 ・受領証の査証 ・受領証記載の合計支払額の転載・検査 ・納税名簿及び収穫されたカルダモンの受領 ・カルダモンの売上利益の管理 ・収穫者名簿作成時の収穫者への手付金の必要性の把握 ・理事長官に対する手付金の貸付提案
バラート (Barat)	<ul style="list-style-type: none"> ・補佐官 / 副知事, 選挙による選出 ・カルダモン徴税制度の総徴税官 ・収穫者に対する受領証の発行
州役人 (fonctionnaire provincial)	<ul style="list-style-type: none"> ・収穫前における収穫者名簿の確認 ・収穫されたカルダモンの受領 ・収穫の実施許可 ・納税者名簿の作成
メー・スロック (Mé srocs)	<ul style="list-style-type: none"> ・収穫者名簿の作成 ・緊急時の収穫実施許可 ・仮受領証の交付 ・収穫の収益の一時受取り
チュムトップ (cuntups)	メー・スロックの補佐役

出所：[ANC RSC 25729; 364] をもとに筆者作成。

たちで収穫日を決定²⁶⁾したとする指摘もある [ANC RSC 11529]。

このように、山脈の村落や収穫地ではフランス人行政官の現地訪問が限られており、制度改革後も旧体制の権利関係や役職が存続していたと考えられる。また、旧体制下では公式にはチャン・ヴァンが収穫日を決めていたが、事前に村の祭司に相談していたとする指摘から、事実上は村の祭司が収穫日の決定権をもっていたと推測される。このことは、収穫地により近い現場で収穫に関わった役職が収穫活動に影響力をもっていた可能性を示唆する。

そこで、以下では実際に収穫現場を統率した役割について、祭司や儀礼との関連性についても視野に入れて検討する。

3) ドンカウによる儀礼と収穫現場の統率

旧体制下でドンカウ (*Dangkau*)、ないしドンカウ・ネアック・ター (*dângkhaô néac ta*) と呼ばれた役職は 19 世紀末の制度改革後も収穫現場に関与した役の一つである。1897 年政令とルソー報告書では、ドンカウについて、カルダモンの森の見張り役、生産量の計量と徴収、チャン・ヴァンの補佐役という以外の詳しい説明はない (表 6)。しかし、この呼称をもつ役割は儀

26) 制度改革後は新役職のバラートが収穫を監督し、収穫日を調整・決定することになっていたが、実際はメー・スロックが規定を無視していたとする例もある [Morizon 1936: 87-88]。

礼と収穫現場の統率役として 20 世紀以降の文献にも登場する。さらには現在も収穫前の儀礼が行われる OS 区の守護霊 S 氏も生前はドンカウと呼ばれ祭司を経験したと伝えられている。

ただし、カルダモンの儀礼と収穫現場の統率役を指す呼称は複数あり、ドンカウの他にも、スモーン (*smoon*)、メー・プレイ (*mé prey*=森の長)、という呼称もあった [Baradat 1941; Martin 1976; 1997]。同様の呼称は調査地でも使われていたが、その他にもコムナン (*kom-nang*)、メー・コントリエニュ (*me kontrienyu*)、メー・コイ (*me koi*)、メー・スマン (*me smung*) といった呼称も使われていた。その意味内容を確認すると、各呼称には複数の意味があり、必ずしもカルダモンの儀礼と収穫に直結しない意味で使われる例もある (表 8)。呼称の多様性と多義性の背景の検討の余地はあるものの、ここでは特にカルダモンの収穫に関わる側面を中心に、これらの呼称を使うものとする。

表 8 収穫現場の統率者に関わる呼称の種類と意味内容

呼称の種類	意味内容
ドンカウ	<ul style="list-style-type: none"> ・森の中でカルダモンの収穫集団を統率する人 ・沈香、樹脂の儀礼と収穫を統率、森に詳しい人として現場を案内する ・林産物を買取る商人・仲買人 ・辞書上の意味は「1. 商店主, 2. 網元」, 中国語の「掌櫃」に由来 [坂本 2001]
スモーン	<ul style="list-style-type: none"> ・チョーンの民族の言葉でカルダモンの収穫を統率する人を指す ・沈香、蜂蜜、樹脂の収穫を統率する人を指す場合もある
メー・プレイ	<ul style="list-style-type: none"> ・カルダモンの収穫に限定して使用される呼称で他の林産物の統率者と区別される ・メー・プレイをスモーンと呼ぶ場合もある ・儀礼に精通した収穫集団の統率者を意味する ・森林行政官を指す場合もある ・カルダモンを始めとし森林の保護をする人
コムナン	<ul style="list-style-type: none"> ・収穫前の儀礼開催を住民に告知し、儀礼の準備と執行を担当 ・精霊や守護霊に関わる仕事の責任者 ・カルダモンの儀礼以外の年中行事に関わる祭司も担当 ・他のスモーンよりも物事に詳しい人
メー・コントリエニュ	<ul style="list-style-type: none"> ・山岳民の酋長
メー・コイ	<ul style="list-style-type: none"> ・関所の長、税関長
メー・スマン	<ul style="list-style-type: none"> ・カルダモンの儀礼の祭司。収穫には出向かず村で収穫者の帰りを待つ

出所：現地調査, [Baradat 1941; Martin 1976; 1997; 坂本 2001] をもとに筆者作成。

注 1：ルソー報告書では儀礼の呪術師についての記述箇所にも *Smens* という役割が登場するが、これが表中のスモーン、またはメー・スマンを指しているのかどうかは不明。

注 2：ドンカウをタイでカルダモンを栽培するカルダモン園の所有主として挙げる例もある。タイのドンカウは収穫に参加せず、栽培地の労働者 (*kon chunol*) の雇用者 (*mé chnuol*) の関係にあり、祭司役割もないという [Martin 1997: 154-155]。

注 3：ドンカウ/スモーンは 5～10 人の集団に 1 人おり、各村・行政区に 1～2 人いたとされる (OS 区, RC 区での聞き取り)。

注 4：呼称に多様性と多義性がある詳細の背景は不明だが、地域・時代・状況により呼称が使い分けられ、各呼称の役割を異なる人物が担当した場合や、同一人物が複数の役割を兼務する場合があったことによると思われる。OS 区での聞き取りによると、村ごとに呼称が異なる例もあったという。

植民地期の民族誌 [Baradat 1941: 68-69]²⁷⁾によると、ドンカウ・クロヴァーニュ (*Dangk-hau Kravanh*) とは、カルダモンの領主 (Seigneur des cardamoms) であり、森の長 (maitre de foret) であり、そしてまた祭司 (officiant) であったとされる。そして、世襲制のもとで後継者を事前に選び、時間をかけて森林と儀礼の知識を伝授した。カルダモンの収穫に関しては、森の中での探索を指揮し、開花²⁸⁾と成熟状況を確認して収穫日を決定し、収穫後にはその役目として収穫者から各自が収穫した実の少量を徴収していた。

儀礼に関しては、植民地期にはカルダモンが発芽する2月²⁹⁾にも儀礼を開催した地域もあり、その目的は新芽を祝うもので、余分な下生えの除去、枯れた苗の植え替えがなされた [*loc. cit.*; ギュイヨ 1987: 120-121]。そして、実が成熟する7月の儀礼後に収穫が解禁されたが、この儀礼の目的は森の精霊に収穫許可を得て、森の中で収穫中にトラなどの動物に襲われたり、病にならないために安全を祈願し、豊作を祈願するものであった [Baradat 1941; Martin 1976; 1997]。³⁰⁾ ただ、収穫は実が完熟して中の種が飛び散る前に行う必要もあった [ギュイヨ 1987: 120-121]。

ドンカウは森の中で収穫者を庇護³¹⁾する役割もあり、夜間には各メンバーが休息する一方で、ドンカウは線香に火をつけ精霊の庇護のもと野営地を設置した [Baradat 1941: 69]。

また、収穫は集団を形成して行われた。植民地期には行政単位に基づいて収穫対象の区画が定められ [*loc. cit.*]、1960年代は国の林業部門のもと村・郡単位で集まった50～100人の集団が収穫を行った [Martin 1976: 207]。

以上のようにドンカウの役割とは収穫前には、実の生育状況の確認を通じて適度に熟した実を収穫ができるよう儀礼と収穫日を判断し、儀礼後に収穫の解禁を行い、収穫時には収穫集団を統率・庇護し、収穫後は収穫した実の一部を収穫者から徴収するものであった。

4) 1950～60年代——地方行政の収穫活動への関与

一方で、1960年代には地方行政も収穫活動の統制に関与した [*loc. cit.*; Martin 1997: 240]。例えば、当時は郡知事 (*cavfay srok*) の監督のもと、区長 (*mé khum*) を介して収穫が統制され、村 (*phum*) のグループが収穫範囲に応じて編成されていた。森の中では村の長が収穫に参加する場合もメー・プレイに従わねばならなかったが、メー・プレイの権力は森の中に限ら

27) カルダモン収穫地の名にクロニューン (Kranhung)、ピアム・プル (Peam Prus) を挙げている。

28) ルソー報告書は3月に花が咲くとあるが、RC区では2月の開花も確認できた (2010年調査)。

29) 調査地では2月の儀礼の例を確認できていないが、儀礼の時期も地域に応じ様々であったと思われる。

30) カルダモンに商業的価値があったことから儀礼は収穫地の生産拠点を確保する目的もあったと考えられるが、詳細は更に検討を要する。

31) 収穫の統率役と収穫の参加者の関係は収穫時に使われる人称代名詞にも表れており、前者は「父 (*ov*)」、後者は「子供たち・甥 (*kon kumoy*)」と呼ばれた [Martin 1976: 215; 1997: 154]。

れ、村の中では村の長の地位が高く、収穫後の販売は地方行政が運営する組合を介して行われた [Martin 1997: 148, 285]。

5. 北部と南部におけるカルダモンの分布域と収穫現場の統率役の相違

では、山脈中央部の北部と南部では誰が収穫を統率したのだろうか。両地域出身の住民に「収穫の責任者 / 担当者 (*neak totuol bontuk*) は誰か？」と聞くと、郡知事、区長などの答えがあったのに対し、「収穫の統率者 / 指導者 (*neak dek noam*) は誰か？」と聞いた場合は、ドンカウ / スモン / メー・コイなどの答えがあった。このことから、地方行政役職と森の中で収穫を統率した役の間では一定の役割分担があったと考えられる。³²⁾

しかし、「収穫を統治 / 管理 (*krup krong*)」した人物として言及されたのは、北部ではドンカウ、南部では郡知事であり、収穫に影響力をもった者は地域により異なっていた。

加えて、カルダモンの分布も北部と南部では異なっていた。これらを念頭に置き、以下では、北部と南部のカルダモンの利用をめぐる歴史動向を具体的に検討する。

1) 北部——カルダモンの名産地におけるドンカウの役割³³⁾

現在の OS 区の居住域でオー・サオム (図 4) と呼ばれる場所はかつて森に覆われていた。³⁴⁾ この地域はかつて「カルダモン山 (*phnom kravanh*)」とも呼ばれ、行政上の名も地名と同じ「プノム・クロヴァーニュ郡」(図 4) であった (旧 RC 区出身 60 代男性, TTL 区出身 70 代男性)。そして、この地域で収穫されたカルダモンの実からは 1 級品質のプレ・カラー (気付け薬) を作ることができ、過去には多くの実が産出されたが、その理由は「土地が良いから」³⁵⁾ であった。このように北部はカルダモンの名産地とみなされてきた。

カルダモン山から地理的に近いヴィアル・ヴェーン (図 4) や、旧 RC 区 (図 4) を出身とする住民は、この付近の森でカルダモンを収穫した経験を語る者も多い。ただ、旧 RC 区にはカルダモンの森が無かったため、収穫は OS 区付近の森で行われた (旧 RC 区出身 70 代男性)。また、ヴィアル・ヴェーンは現在の OS 区 KCR 村に地理上は重複するが、そこは湿原

32) 以下では「収穫の責任者」「収穫の統率者」の役割名に区別を要する場合はその旨を明記する。

33) 本節の聞き取りは特に断りの無い限り OS 区在住者への聞き取りによる。

34) 旧 RC 区出身 60 代男性によるとオー・サオムは現 OS 区の CL 村, K 村, OS 村周辺に相当するが、かつては一帯が森であった。ただし、1960 年代のオー・サオムは現在の村落から見て南東の位置にあった [Hammond and Hor 2002: 65]。この辺りで収穫経験をもつ旧 RC 区出身 RC 区在住の男性はオー・サオムの森を「プレイ・トム (*prey thom*=大きな森)」と呼んでいた。「プレイ・トム」とは、樹冠が集まり土壌は玄武岩、粘土質の赤土、水質性の灰色土壌等の地層の上に、厚い傾斜地や排水性のある土地をもつ、人に恐れを与える鬱蒼とした森とされる [Martin 1997: 47-48]。

35) OS 区のカルダモンの森の外縁には畑が広がり、作物の育ちが良い土地として住民に認識されている。FFI 職員によると、森の中には火山活動により形成されたと推測される火口湖があり、この周囲の肥沃な土地にカルダモンが多く自生する。

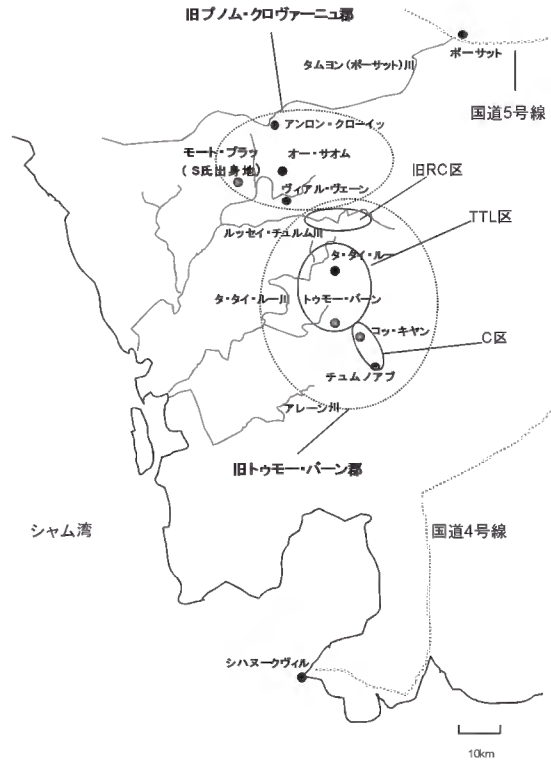


図4 1950～60年代のカルダモン山脈の地図

出所：[Martin 1997] をもとに筆者作成。
注：郡および区はおおよその範囲を表す。

が広がる土地であり、この地域出身の70代男性も収穫時にはカルダモン山に出向いていたという。

過去にカルダモン山で収穫経験のある住民によると、収穫は山地民のチョーンとポーの仕事であり、外部者が実をとることは禁じられていた（TTL区出身70代男性）。そして、実の盗みを防ぐために、花が咲く頃や、実が熟する頃になると、その旨が告知され、ドンカウ、警察、兵士などが3～5人で警備を行った。儀礼はカルダモンを保存するために行われ、収穫の解禁前に実を盗んだ者は処罰された（旧RC区出身60代男性2名、及び80代男性、旧RC区出身RC区在住60代男性）。

北部の「収穫の統率者」の後継者は、50歳以下で前任者と家族、民族が同じであること、さらに知識に長けていることが求められ、より物事に詳しい人がいれば、その人が敬われたという（TTL区出身70代男性、旧RC区出身60代男性）。

2) 北部——ドンカウ S 氏の影響力³⁶⁾

北部では OS 区の守護霊となったドンカウ S 氏が影響力をもっていた。S 氏は 1905 年頃生まれと推測され、出身地はモート・プラッ村³⁷⁾ (図 4) であり、山地民のチョーンであった。

もとは普通の人だったが勉学に励み儀礼や呪術の知識を多く身につけ、ヴィアル・ヴェーンの寺院で出家した後にタイの寺院での修行を経て、30 歳で還俗して在家信徒 (*upasok*) となり、仏教を統治した。また、仏教祭司のアチャー (*achar*)³⁸⁾ を経験した他、薬の知識も豊富で病人の治療を得意とした。

林産物の収穫については、カルダモンのほか、沈香や樹脂の収穫も統率した。³⁹⁾ S 氏はタイにも親族がおり、タイに向いて不在の時もあったが、その場合は彼の従弟が林産物の収穫の統率を代行したという。ただし、区長や商人組合も「収穫の責任者」として収穫活動に一定の関与をしていた。

このように、S 氏は様々な分野に関わる知識に長けた人として影響力をもっていた。

3) 南部——カルダモンの植栽地における収穫の統率者の盛衰

南部で過去にカルダモンが多く分布したのはトゥモー・バーンとコッ・キヤン (図 4) であったが、一部にはカルダモンの分布が少なかった地域もあり、C 区チュムノアブ村 (以下 C 村: 図 4) の住民は収穫時にトゥモー・バーンに向く必要があった (TTL 区出身 70 代男性, 60 代男性, C 村出身 70 代男性)。

トゥモー・バーンとコッ・キヤンは、いずれも地理上は現在の RC 区に位置する。前者は過去に郡役場があった場所である。後者は C 区にあった村の名 (以下 K 村) だが、現在も RC 区のカルダモンの森の最も近くに位置する村として残る。

K 村ではどのようにカルダモンが収穫されていたのだろうか。以下は K 村で収穫を統率したとされる H 氏の親族にあたる 50 代女性とその叔母 (80 代) への聞き取りを整理したものである。

36) 本節で記述する S 氏の来歴は OS 区在住の旧 RC 区出身者 (60 代後半男性 2 名, 40 代男性, 50 代男性), S 氏の義理の息子 (50 代), S 氏の従弟 (80 代) への聞き取りによる。

37) モート・プラッ村が属する行政区には諸説ある。旧 RC 区出身 60 代男性はリエチ郡トラボン・ボン区としていたが、1918 年付史料はスレ・タン・ヨー区に属するとある [ANC RSC 11529]。また、プノム・クロヴァーニュ郡に属する区にトラボン・ボンとリエチを挙げる例もある [Morizon 1936: 155-156]。

38) アチャーは経文と儀式を熟知する在家仏教徒の祭司。戒律日の布施、その他の儀礼進行役を務め出家と在家の橋渡しを行う [高橋 2006: 86; 2009: 367]。

39) ただし、旧 RC 区出身者によると各村・区のカルダモン収穫地に応じて儀礼の祭司も異なり、旧 RC 区では山地民ポーの祭司メー・スマンが現 OS 区より北の地から呼ばれ、ヴィアル・ヴェーンにも別の祭司がいた。S 氏の父は祭司コムナンであり、S 氏はモート・プラッ以北の収穫を担当したとされるが、収穫地と祭司の相互関係の詳細は今後の調査で検討予定。

それによると、K村では植民地期からカルダモンの収穫があったが、本来はこの付近の森もカルダモンがあまりなかったという。そして、植民地期の頃にポーサットからゾウに乗せて運ばれたカルダモンが植栽されてからカルダモンが多く分布するようになった。植栽はフランスが行わせたが、K村近くの土地が選ばれたのは「土地が良い」とみなされたからであった。

K村の「収穫の責任者」は区委員会の区長とメー・コイであり、「収穫の統率者」はメー・コイであった。K村でメー・コイとは、メー・プレイを意味し、カルダモンの森の伐採を禁止したが、植民地期はH氏がこの役割を担当した。H氏による植栽活動への関与の詳細は定かではないが、彼は森の中で儀礼と収穫の統率も担当した。

また、植民地期は実が成熟するまで待たねば収穫の許可は出ず、実はフランスに売るために収穫されたが、その相手はカンボジア独立後には商人になった。また、販売は「カルダモンの守護者 (*neak ka pia kravanh*)」というグループのもとで行われた。

カンボジア独立後にはH氏の後を息子のP氏が継いだ。しかし、P氏には男の子が生まれず、子供は女の子1人のみであったため、メー・コイの職はP氏の代で世襲が終えられた。そして、これ以降は区長と村長を兼務したP氏の甥とその他の住民がカルダモンを共同で管理する (*krup knia*) ようになった。前述のC区C村出身の70代男性は、昔は実が熟すると区長が収穫時期を告知し、収穫集団を編成したと話しており、この区長がP氏の甥と同一人物かどうかは確認できていないが、少なくとも行政上は現場に近い立場にあった区長も一定の役割をもって収穫に関与したようである。

4) 南部——移植栽培事業を主導した郡知事の影響力⁴⁰⁾

一方で、1950年以前からトゥモー・バーン郡の郡知事⁴¹⁾を務めたT氏も収穫活動に影響力をもち、郡内でカルダモンの移植栽培事業を主導した。これは、森の中に自生するカルダモンを一か所に集約した森をつくる事業であり、収穫時期には郡内の各区(旧RC区、TTL区、C区、TDP区、P区)から郡役場のあったトゥモー・バーンに住民が召集された。住民が収穫した実は郡知事が自ら買い集め、仲買人が買い取る際も郡知事の許可が必要だった。T氏は1957年に亡くなるが、その後1970年までは彼の存命時と同様の収穫活動がこの地域の慣行になった。

シハヌーク時代の「収穫の責任者」として郡知事を挙げた旧RC区出身の50代男性によると、郡知事はメー・プレイよりも権力があり、メー・プレイは郡知事の指示に従い森の中で収

40) TTL区集会、および同区出身・在住の70代男性、60代男性への聞き取りによる。

41) TTL区住民は郡知事を地元出身と説明したが、K村住民は植民地期もシハヌーク時代も郡知事は首都から派遣された外来者であり、両時期の担当者は親族関係に無かったという。1960年代の郡知事の出身地は不明だが、当時の民族誌は郡知事が外来者であった点が示唆されている [Martin 1997: 80, 144]。公式にはシハヌーク時代の郡知事は州知事が任命していた [高橋 2001: 85-86]。

穫を統率したという。

1960年代にはタイ国境に隣接する地域の州知事や郡知事などの高官は軍人から雇用され、トゥモー・バーン郡の郡知事も軍と関係をもっていたとされるが [Martin 1997: 80, 144]、こうした国からの後ろ立ても郡知事の影響力に関連したと思われる。

以上の北部と南部の動きから、山脈一帯にカルダモンが分布したわけではなく、同じ地域内でも必要に応じて分布の多い場所へ出向いての収穫や、分布の多い北部からそうでない南部への植栽もあったことがわかる。⁴²⁾ 郡知事の移植栽培事業が K 村での植栽の直接の流れを汲むものか否かは定かではないが、北部から南部への植栽は 20 世紀初頭にポーサット州で行われた植栽による収穫地拡張の動きにも関連したと思われる [IS 1906: 22]。こうした動きは山脈内の地域間で交流があった点を示唆するが、カルダモンそのものだけでなく、収穫に伴う地域間での人の移動もあった。例えば、北部と南部の両地域で収穫経験のある人の中には、旧 RC 区出身者もいれば、TTL 区出身者もいた。

しかし、これらの収穫活動も 1970 年代以降の出来事で中断され、それとともに、カルダモンをめぐる社会関係も解体された。

IV 1970～1980年代——カルダモンと地域社会の関係の解体⁴³⁾

1. 1970年代前半——販売の中止と南部における郡知事の失脚

1970 年前半には米軍の支援を受けたロン・ノル政権とボル・ポトを書記長とするカンボジア共産党を中心に結成された民族統一戦線との間で内戦が始まる。だが、カルダモン山脈周辺には 1969 年時点でクメール・ルージュ勢力が台頭した地域もあり、1970 年 5 月には山脈全体が包囲された [Martin 1997: 81-82]。⁴⁴⁾

カルダモンの利用については 1970 年までは収穫前の儀礼が山脈内で一般的に行われていたが [Martin 1976: 208]、政情不安定化とともに販売は中止された。

北部では、1969 年 6 月にクメール・ルージュの攻撃を受けたアンロン・クロイッ (図 4) の販売組合が閉鎖され、その後ヴィアル・ヴェーンの組合に合併され、カルダモンの売買が一

42) カルダモンの分布が偏在する点は植民地期史料にも指摘があり、主に高原や山麓の森、標高 400～600 m の深い森で土壌が肥沃な土地に自生するとある [ANC RCS 11529]。調査地のカルダモンの森周辺の標高は OS 区 550～663 m [Daltry 2002: 25]、RC 区 500～581 m (JICA 作成地図 1998-2002) である。

43) この時期の地域動向は繊細な問題も多く含むため現時点での調査成果は限られている。そのため、カルダモンの利用に関する記述は主に各地域の大まかな動向から推測した内容を含む。

44) マルタンは 1970 年 5 月に山脈での現地調査を中断したが、1979 年にタイ国境の難民キャンプで旧 RC 区、TTL 区の住民、ボル・ポト政権期に山脈へ強制移住した人びとへの聞き取りから 1970 年代の動向を限定的ではあるが記録している [Martin 1997: 15-16, 288]。

度は再開されたが、これも治安悪化により運営難になった [Martin 1997: 81, 285]。

南部では、TTL 区住民によると 1970 年代以降はかつて移植栽培事業や販売面で影響力をもった郡知事のような人物が不在になり、1975 年にはカルダモンの栽培と販売が中止された。

郡知事がこの時期から不在になった背景には、1970 年代初頭に郡の中心地を含めて山地で交戦が行われた点に加え、国境に接する山脈の郡知事や州知事が軍人から雇われていた点、当時クメール・ルーージュの主な標的となったのが軍隊、警察官、行政官であったと推測されている点も関連すると考えられる [ibid.: 80-81, 144]。つまり、郡知事が公職にあり戦闘に直接関わる立場にあったことが内戦下での失脚を早めたと考えられる。

こうした動きの中で、1975 年にクメール・ルーージュ勢力によるプノン・ペン入城をもって、1970 年代前半の内戦は終結し、ポル・ポト政権が誕生した。

2. ポル・ポト政権 (1975 ~ 1979 年) の共産主義政策の影響

ポル・ポト政権の極端な共産主義政策はカンボジア社会全体を根底から解体するものであり、それはカルダモン山脈でも同様であった。共産主義政策は山脈の地域社会とカルダモンの利用にどのような影響を与えたのだろうか。

まず、住民の強制移住が行われ、旧 RC 区住民は現在の OS 区と RC 区に相当する地域に移住させられた。⁴⁵⁾ これについて旧 RC 区出身で現在の RC 区に住む 60 代後半男性は「旧 RC 区には 1,000 家族以上⁴⁶⁾がいたが、今では (現在の) RC 区と OS 区に別れてしまい、何家族いるか分からないくらい少なくなってしまった」と話した。筆者が確認した範囲でも、旧 RC 区出身者を含む家が RC 区で 7 軒、OS 区で 22 軒あった。森林局職員によると、現 RC 区の地名はこの時期に移住した旧 RC 区住民が現在もこの地域に住むことに由来し、OS 区の居住域の一部は強制移住とともに本来は森林があった場所が伐採されて整備されたという。

そして、強制移住の目的地では計画経済のもとコメ増産のための集団農業が実施された。

北部では、1977 年に大半の住民がヴィアル・ヴェーンの東方の地に再移住させられた。そして、ヴィアル・ヴェーンに残った兵士と労働ユニット担当者により、湿原を利用した灌漑と水田稲作が試みられたが不作に終わった [Ironsides *et al.* 2002: 8]。

南部では 1960 年代にトゥモー・バーン郡に属した地域は、旧 RC 区のみならず、低地の住民

45) 旧 RC 区住民の中には南部の C 区 C 村に移住した者もいた [Oum 2009: 72]。例えば、旧 RC 区出身の 60 代男性は 1971 年よりクメール・ルーージュ兵になり 1979 年まで C 村に移住、その後 1990 年にタイ国境から OS 区に移住した。また、TTL 区住民は本来の居住域が強制移住の対象地であったため、基本的にはポル・ポト政権期も出身地にとどまっていた。

46) 1969 ~ 70 年の旧 RC 区の人口は 1,000 人 (家屋数 209 軒) [Martin 1997: 93-94]、当時のヴィアル・ヴェーン、オー・サオム近辺の人口は 1,152 人と推定されている [Hammonda and Hor 2002: 64]。

を含めた強制移住の目的地となり、これにより数百人単位で人口が増加した [CI 2002: 3; Oum 2009: 72]。南部に住民が集められた目的も農地を開墾するためであったが、TTL 区住民によると、当時 20 ha の森が開墾されたという。

また、市場・貨幣経済の中止、伝統文化の否定も行われ、カルダモンの販売は 1970 年代前半以来、中断されたままの状態となり、地域の祭礼をはじめ、カルダモン収穫の慣習や、儀礼も中止された。ただ、OS 区では食用・薬用に限り利用例があった。

さらには、カンボジアの主流派・多数派をなすクメールへの民族同化政策も実施されたが、山脈の住民はカンボジア国内では少数民族のチョーンの立場にあったことから、クメールになることを強要された。⁴⁷⁾

1) カルダモンを介した地域内外の社会関係の解体

共産主義政策はカルダモンを介して結ばれていた住民間の社会関係の解体にも及んだ。例えば、強制移住による同郷出身者の離別や、伝統文化の否定による収穫慣習や儀礼の中止は、収穫を通じて山脈各地の住民が集い交流する機会を失わせた。また、市場・貨幣経済の否定による販売の中止は、カルダモンの販売を介して結ばれてきた中央と地方の交易関係のみならず、輸出を通じたカンボジア国内と海外との交易関係を解体させ、山脈の地域社会と外部社会との繋がりを分断する事態をもたらした。そして、民族同化政策は、収穫と儀礼の慣習を担ってきた山地民の立場を否定し、その慣習を途絶えさせることを意味した。

これらの出来事はカルダモンと地域社会との相互関係にも断絶をもたらした。

2) カルダモンと地域社会の相互関係の断絶

強制移住により出身地から離れざるを得なくなったことや、伝統文化の否定による収穫慣習の中止、集団農業による森林開墾は、それ以前のように住民が収穫地に関与し続けることができなくなることを意味した。このことは、1960 年代まで実践されてきたような、ドンカウによるカルダモンの生育過程の把握や、植栽を通じた手入れがされなくなることにより、実の品質や生育環境の維持にも影響を与えたと考えられる。実際に、旧トゥモー・バーン郡 P 区出身で RC 区に住む 50 代男性も「毎年収穫すれば質の良い実がとれるが、3 年間収穫しないとその質

47) OS 区でワニ保全活動を行う森林局職員への聞き取り。民族同化政策下ではベトナム人、中国人、チャーム人等の少数民族は強く迫害されたが、山地民は「基幹人民」とみなされ、他の少数民族や都市居住者であった「新人民」に比べて、過剰な迫害を免れる傾向にあった。しかし、文化・経済面では同化対象となり、山地から低地に移住させられ灌漑建設やクメール語を話すことを強要された [Clarke 2001: 420]。実際に TTL 区の 70 代男性はボル・ポト政権期に低地の言葉を覚えたと話していた。また、山脈にクメール・ルーージュが台頭した当初、山地民は革命の同志とみなされ、反抗した者を除き住民は虐殺の対象にはならなかった [Martin 1997: 288] が、ヴィアル・ヴェーンでは農業開発が失敗すると住民は敵 (*khmang*) と呼ばれた [Ironsides et al. 2002: 8]。

は落ちる」と話していた。

それはまた、収穫活動を通じて人々がカルダモンの利用に関わる知識の習得や経験を積む機会の喪失をも意味した。これは、「クメール・ルージュが来て以降カルダモンは失われてしまい、一部の若い世代の人はカルダモンについての知識をもたない人もいる」と話した TTL 区出身同区在住の 60 代男性の言葉にも表れていた。

3. 1980 年代——戦時下における経験の相違

1979 年 1 月にポル・ポト政権は崩壊し、これ以降はベトナム軍の支援を受けた人民革命党政権が国内を実効支配する。しかし、タイ国境の山岳地帯に撤退したクメール・ルージュ勢力を追走したベトナム軍と人民革命等政府軍の間で戦闘が繰り広げられ、1980 年代以降のカルダモン山脈は激戦区となった [天川 2001: 45; Hammond and Hor 2002: 66]。

しかし、同じ戦時下であっても北部と南部では状況が異なっていた。

1) 北部——森の中での避難生活と S 氏による戦災避難の主導

北部では戦災の中で、ポル・ポト派の兵士として戦った山地民もいたが、そうした人も含めて、人々は山脈各地を転々として避難生活を送ることを余儀なくされた。OS 区住民によると、戦時中は森の中に隠れて生活した場合もあれば、タイ国境や、ヴィアル・ヴェーンの東方に避難する場合など様々であった。

森の中に避難した人々は食糧不足による飢えの時期に野生のイモを食べて生活していた [Ironsides *et al.* 2002: 8]。例えば、戦火を逃れ OS 区に移住したスレ・タン・ヨー区出身の山地民ポーの 40 代女性は当時の生活について「ヤムイモ (*kudoich*),⁴⁸⁾ タシロイモ (*toal*),⁴⁹⁾ 野生イモ (*domlong prey*) を食べていたが森には塩がなかった」と話し、またクメール・ルージュ兵を経験した旧 RC 区出身 50 代男性は「森にはキャッサバ (*domlong mi*)⁵⁰⁾ があったから戦争中も食事ができた」と話していた。このように、食糧を林産物に依存した背景には、戦時中に農業を行い主食のコメを得るのが難しい状況にあったからと考えられる。⁵¹⁾

こうした状況のなかで、ポル・ポト政権期に各地に移住させられていた住民の中には、この頃にヴィアル・ヴェーン周辺の故郷に戻り始めた者もいた。その中にはドンカウ経験者 S 氏もおり、ベトナム軍から隠れるために住民を森の中に避難させた [loc. cit.]。

S 氏が戦災避難を主導した話は現在も OS 区で伝えられている。OS 区の学校教員によると、

48) 学名 *Dioscorea hispida* (ヤマノイモ科ヤマノイモ属ミツバトコロ)。

49) 学名 *Tacca pinnatifida* (タシロイモ科タシロイモ)。

50) 学名 *Manihot esculenta* (トウダイグサ科イモノキ属キャッサバ)。

51) OS 区では長年の戦乱で農地が放棄され、土地が森の状態に戻り生産力が失われ、水田では成長しすぎた草が排水路を 4～5 km に渡り塞ぎ、過剰に浸水する事態があった [Ironsides *et al.* 2002: 8]。

S氏は内戦中に中立の立場をとり、住民を森に避難させた際は予知能力をもって軍隊が来ることを事前に察知したという。また、社会規範の維持にも務め、盗みを禁止し、隠れて盗みを働く者に事前に気付き、衛生を重視して飲食用の水を確保するために水場での排便を禁止した。

さらに、S氏はOS区の南側にあるカルダモンの森の伐採も禁じたとされる [loc. cit.]。

このように、戦前に多分野で才能をもっていたS氏のもとで住民間の社会関係を取り戻そうとする動きや、カルダモンの森を再び維持しようとする動きがあった。

2) 南部——故郷を離れての長期にわたる戦災避難

ボル・ポト政権期まで現在のTTL区とRC区に相当する地域にいた住民は、1979年以降、ベトナム軍の主導のもとコッ・コン州の南にあるCP区に避難移住をした。そこでの避難生活は18～20年以上にも及び、山地への帰還時期は1990年代後半以降になった(表9)。

当時の生活について旧RC区とTTL区の出身者は「砂地だった」「CP区での生活は嬉しくない」と説明し、畑や水田の農地も足りなかったという。地元の祭礼も当時は中断されたままで、再開されたのは出身地に帰還してからであった。

1997年11月20日、政府の帰還令のもと、CP区にいた住民の多くはこの時期に山地に帰還した [CI 2004: 3]。だが、その動きの中では同郷出身の親族の離別をとまなう例もあり、旧RC区出身70代後半男性は山地に戻る際に本人は高齢のためRC区にとどまったが、その男性と

表9 山脈中央部に出身地をもつRC区、TTL区在住家族のCP区における避難期間

現在居住の行政区	出身地	CP区 の避難経験 家族数	CP区滞 在家族別 の滞在期間の内訳		
			家族数	CP区滞 在期間	現住所 の居住開始年
RC区	旧RC区	5	1	17年	1996年
			2	18年	1997年
			2	19年	1998年
	コッ・キャン	1	1	—	—
	トゥモー・バーン	1	1	19年	1998年
TTL区	TTL区	5	1	5年	1998年
			2	19年	1998年
			1	20～21年	1999～2000年頃
	チュムノアブ	1	1	—	—
	チュムノアブ	1	1	18年	1997年

出所：現地調査により筆者作成。

注1：TTL区出身でCP区滞在期間が5年の家族は、その他の時期はコッ・コン州のストックという土地に避難していた。

注2：山脈中央南部のチュムノアブ出身で現在TTL区に住んでいる家が1軒あるが居住地を変更した理由は未確認。

注3：RC区在住の旧RC区出身家庭は7軒確認済みだが、うち2軒はCP区滞在経験を確認できていないため表では省略した。

注4：表内の家族数は聞き取りで確認できた数値。実際の数はより多いと考えられる。傍線部の数値は未確認。

表 10 山脈中央部に出身をもつ家族の出身地と現在の居住地

山脈中央部内の出身地	現在の居住地				合計 (単位：家族数)
	山脈中央北部		山脈中央南部		
	OS 区 1 (CL 村・K 村・OS 村)	OS 区 2 (KCR 村)	RC 区	TTL 区	
北部	オー・サオム	1	—	—	1
	ヴィアル・ヴェーン	5	2	1	8
	旧 RC 区	22	—	7	29
	TTL 区	2	—	—	8
南部	トゥモー・バーン	—	—	1	1
	チュムノアブ (C 村)	—	—	—	1
	コッ・キャン (K 村)	—	—	1	1

出所：現地調査により筆者作成。

注 1：OS 区 1 は日常的に、住民が「オー・サオム」と呼ぶ地域を指し、OS 区 2 は住民が「ヴィアル・ヴェーン」と呼ぶ地域を指す。

注 2：K 村は現在 RC 区内にあり、C 村は現在の RC 区の東に隣接する C 区内にある。

注 3：TTL 区出身の OS 区 1 在住家族 2 軒は戦乱を逃れて 1990-92 年に OS 区に移住した。

注 4：旧 RC 区出身で OS 区 1 在住家族の数値は基本的には家主・夫の出身を表すが、妻の出身地が異なる例が 7 組ある。

7 組夫婦の妻の出身地の内訳はモート・ブラッ 2 人、スレ・タン・ヨー 1 人、TTL 区 1 人、ヴィアル・ヴェーン 2 人、バツ・ドムボン州 1 人。これらの妻の出身地は表中の数値には含めてない。

注 5：表内の家族数は聞き取りで確認できた数を表す。傍線部の数値は未確認。

一緒にいた親族の中には、残りの親族がいる OS 区に移住した者もいた。

以上のように、1980 年代の戦乱経験は、山脈の同郷出身者の離別をさらに進めた。この時期に山脈の故郷に戻り始めた者もいたが、その中には実際の出身地とは異なる土地に戻らざるを得ない例もあった。こうした点は、山地民の現在の居住地と出身地が必ずしも一致していない点にも表れている (表 10)。また、山地を離れての避難生活により、カルダモンの利用機会が限られていたことは、商用の実を収穫するための生育環境の維持を難しくした可能性も考えられる。

V 1990～2000 年代——終戦前後から保護林設立後までの カルダモンの利用の再開と盛衰

カンボジアでは 1991 年のパリ和平協定の調印、1993 年の制憲議会選挙を経て新政府が発足し、内戦は終息に向かい始めた。しかし、ポル・ポト派は選挙をボイコットし反政府勢力となり政府軍との戦闘が続いたため、実際に内戦が終結したのは 1990 年代末である。そして、カルダモン山脈も内戦終結時まで戦闘が続いた地域が含まれていた。

1. 南部——森林コンセッション制度下での商業伐採

新政府発足後には国内の森林管理も再開されたが、1990年代の森林政策は森林コンセッション制度に基づいていた。これは、企業に伐採権を与え天然林からの木材生産を合法化し、その引換えに企業がロイヤルティを支払うものであった。この制度のもと外貨獲得を目的に伐採権の付与が乱発され国内各地で森林伐採をめぐる問題が広がった。実際に、国家歳入の2割を木材生産が占めた時期もあり、1990年代は輸出額の7割以上を木材輸出が占めていた [塚本 1999: 3; 吉田 2001: 16]。

カルダモン山脈でも戦争が終息に向かうにつれて商業伐採と林道の整備が始まった [Momborg and Weiler 1999]。RC区とTTL区では1995年から1999年にかけてマレーシア企業が商業伐採と林道建設を行ったが [CI 2002]、1999年から2002年にかけてもRC区とTTL区で合計1,540 haの森林減少があった。⁵²⁾ 1990年代後半から商業伐採が可能であったのは、政府がCP区に避難していた住民にRC区とTTL区への帰還令を出した時期とも重複し、この頃から治安が安定化し始めていたからであろうと推測される。

2. 北部——内戦の継続とS氏の主導による戦時下の社会復興

しかし、ヴィアル・ヴェーン周辺は1990年代を通してボル・ポト派の勢力圏にあり戦闘が続けられた。1997年1月には和平交渉の試みがあり、国境の難民キャンプから住民の帰還が始まったが、同年7月にプノン・ペンで武力衝突が生じたこととともない、戦闘が再開され、住民は再び国境に避難した。⁵³⁾ そして、改めて和平交渉が行われた後に、OS区が政府に統合されたのは1999年1月以降であり、これとともない、もとはプノム・クロヴァーニュ郡の西半分に対応した地域が、新たにヴィアル・ヴェーン郡として設立された [Hammond and Hor 2002: 66-67; Momborg and Weiler 1999: 9]。

その一方で、この時期には戦時下の中でも、S氏を中心に山地にとどまった住民により社会復興が着手されていた。⁵⁴⁾ 1980年代末から1990年代初頭にかけて、ベトナム軍が撤退したのを機にそれまで森に隠れていた人々はOS区の元になる村の建設を始めたが、当時のリーダー的存在であったのがS氏であった。実際に1990～92年の間に戦災を逃れてOS区に移住した

52) Cambodia Atlas [http://www.cambodiaatlas.com/map], 最終閲覧日 2010年5月18日。

53) 1998年の総選挙に先立つ1997年7月、フンシンベック党の党首ラナリットが党勢力拡大のためボル・ポト派に連携を図り、これに対し人民党は軍を動員して阻止した [天川 2006: 210]。1997年1月にポーサット州都で州当局とボル・ポト派幹部の間で和平交渉があったが、プノン・ペンでの武力衝突と同時期にバット・ドムボーン州のサムロート郡で生じた森林伐採をめぐる紛争を機に戦闘が再開され、ボル・ポト派は政府からの離反理由にヴィアル・ヴェーンとサムロート郡の木材伐採権を主張した。OS区付近でもボル・ポト派が戦費調達のためにタイに木材販売を行い、1999年には企業による林道建設と伐採活動があった [Hammond and Hor 2002: 66-68]。

54) 本節のS氏に関する記述はOS区の旧RC区出身者 (60代男性, 50代男性2名, 40代男性)、S氏の義理の息子、学校教員、区集会での聞き取りによる。

山地民は少なくとも7家族おり、うち5家族は旧RC区出身者を含み、2家族はTTL区出身である。

S氏は祭礼の復興にも関与した。1990年代初頭にはカルダモンの儀礼が再開されたが、その際にS氏はその知識の深さが人々から認められOS区の新たな祭司になったという。⁵⁵⁾ 当時は収穫前に実を盗むもうとする者もいなかったとされる。また、仏教やバラモン教 (*promanyu sasna*) の復興にも関与し、これらの文化の4割は戦争により失われたが、残りの6割はS氏のおかげで現在に受け継がれているという。⁵⁶⁾ S氏から受け継がれたとされるこれらの祭礼は今日では「チョーンの民族の伝統・慣習」と説明されることさえある。そして、S氏は1993年頃に88歳で亡くなるが、その後は土地の守護霊として祀られるようになった。

以上のように、南部では商業伐採に伴いカルダモンの森が減少した可能性があるのに対して、北部では内戦が続き外部社会から孤立する傾向にあった中で、企業が参入する大規模な商業伐採は一定程度防止されたと考えられる。そして、戦時下の中でも、S氏が社会復興を主導し、その過程でS氏がボル・ポト政権の民族同化政策で否定された伝統文化や、山地民の民族意識の再構築に何らかの関与をしたことがわかる。

3. 森林政策の転換期における保護林の設立と保全活動の枠組みの地域的相違

内戦が終息に向かう一方で、1990年代後半以降から2000年代初頭には、森林コンセッション制度下で拡大した商業伐採と違法伐採に対して、ドナーやNGOからの批判と圧力が高まり、カンボジアの森林政策が大きな転換を迎えた時期でもあった。これは、国際通貨基金の構造調整融資の中止、森林犯罪監視プロジェクトの開始、伐採活動の全面一時停止措置、森林法制定による規制強化など、一連の出来事に反映されている(表11)。

表11 カンボジア森林政策の転換への動き(1996～2003年)

年月	出来事
1996年	国際通貨基金の構造調整融資の中止(1999年に再開) (森林問題の改善が見られないことを主な理由とする)
1999年	森林犯罪監視プロジェクト開始
2002年	1月 コンセッション制度による伐採活動の全面一時停止措置 8月 森林法制定(合法的な木材取引、違法伐採の摘発、罰則等の制度面を強化)
2003年	森林局の設立(組織面の改正)

出所:[志間2006; 吉田2001]をもとに筆者作成。

55) S氏は旧RC区のカルダモンの儀礼担当ではなかったが儀礼の仕方を熟知していたのでOS区では旧RC区出身者を含めた人々がS氏を新たな祭司と認めたとされる。

56) OS区で葬儀を行った家で葬儀の翌日に旧RC区出身60代男性に聞いた話に基づく。6割という数値は正確に算定したものではなく「感覚として表すならこの程度」という説明であった。この男性は山地民チョーンの宗教は「仏教が2割とすれば、バラモン教が8割を占める」とも説明した。OS区の精霊林、婚礼、森の中で行う葬儀はバラモン教に基づくとされる。

表 12 山脈中央部における保護林設立の動き（1998～2002年）

年月	出来事
1998～99年	農林水産省によるコッ・コン州、ポーサット州の野生生物ハンターへの聞き取り
1999年 4月	大型哺乳類の調査
2000年 1～4月	カンボジア政府の要請を受けて戦後初の生物多様性調査 →森林局、環境省、FFIによりヴィアル・ヴェーン郡、トゥモー・バーン郡で実施。 大型・小型哺乳類、爬虫類、両性類、鳥類、魚類などを調査。
2001年 1月	農林水産省により山脈中央部での森林開発、林産物の商業採取、森林伐採 野生動物捕獲の禁止令 →ただし、山脈の住民による林産物の採取・利用は認められる。
1～2月	カンボジア政府とCIによる保護林対象地の生物多様性保護の覚書 →CIが保護林の資金、技術面の支援をする旨を定める。
2002年 7月	中央カルダモン保護林設立の首相令

出所：[Momberg and Weiler 1999; Dartly and Momberg 2000; CCP and CI n. d.; CI and FA 2007a]
をもとに筆者作成。

同じ頃にはカルダモン山脈中央部でも NGO の支援を通じて保護林の設立に向けた動きも始まった。その過程では、まず農林水産省を通じた野生動物調査、次にカンボジア政府の要請による戦後初の本格的な生物多様性調査を経て、山脈中央部の森林伐採や野生動物の捕獲禁止令が出された。そして、カンボジア政府とCIの間で保護林設立に向けての覚書が定められ、2002年7月には中央カルダモン保護林が設立された（表12）。

また、中央カルダモン保護林設立の提案書では、保護林の意義として、生物多様性保全、分水嶺・水源涵養、考古遺物の存在を挙げ、大陸アジア最後の原生自然という表現のもと生物多様性保全の重要性を強調している [CCP and CI n. d.]。一方で2002年の森林法は、国内の保護林の目的を森林生態系、自然資源の保護とし、森林への影響が少なく済む範囲で林産物採集の慣習的利用権を認める規定がある（第4章、第10条）。

保護林の位置づけに生物多様性保全と森林保護が強調された背景には、従来の森林管理体制からの改善姿勢を国際社会に示す必要性も含まれたと考えられる。⁵⁷⁾ ただし、より現場に近いところでは、北部と南部の間で保全活動が始まった経緯と、その枠組みに相違があった。

1) 北部——終戦直後の復興支援を通じた生活再建を重視する枠組み

1999年、内戦終結後にヴィアル・ヴェーン郡に帰還した難民は、農地の荒廃、食糧生産用の種子（コメ、野菜、果樹）の不足に直面していた。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は40日分の食糧支給、コメ種子の支給等で対応したが、コメ種子の5割は発芽しないなど、支援には限界があった。これを受けて、国連開発計画（UNDP）とNGOによる復興需要の調査がOS

57) 2003年の国民議会選挙も森林政策改革の動きの一因になったと思われる。

区住民を含む難民を対象に行われた。この調査には FFI と環境省も参加したが、これはヴィアル・ヴェーン郡が環境省の管轄する野生動物保護区内にあったからであり、⁵⁸⁾ 調査結果を踏まえた優先課題の一つに食糧不足への対応が挙げられ、生物多様性保全と戦後の社会復興を統合した支援の必要性が提言された [Hammond and Hor 2002: 67; Momberg and Weiler 1999; Momberg and Ken 1999: 46-47]。

一方、2000年に行われた生物多様性調査では OS 区のヴィアル・ヴェーンの湿原に絶滅危惧種のシャムワニ (*Crocodylus siamensis*) の生息域が確認されたことが重要成果とされ、この地域を保護林に含める対応がなされた [Daltry and Momberg 2000; Daltry 2002]。そして、2001年2月・4月、2002年2月の生態学・社会経済調査を経て、ワニの保全プログラム (Cambodia Crocodile Conservation Programme) が FFI と森林局により開始された。この活動ではワニ保全の必要資金を住民に支給する一方で、農作物種子の支給、農業技術、カルダモンの販売など周辺分野への支援が中心となったが、その目的は住民が食糧自給に必要な資金を得ることにあった [FFI 2008; Oum 2009]。

ただ、OS 区は道路が未整備のアクセスの困難な立地であったため、1999～2000年代初頭の調査は乾季に限定され、道路が整備されるまではコック・コンから伐採企業の林道を経由して現地訪問がされていた。⁵⁹⁾

2) 南部——国道開発の影響に対応するための森林保護を重視する枠組み

2001年3月、保護林設立に先立ち、その全般的な管理のための保全プログラム (Cardamom Forest Conservation Program) が森林野生動物局と CI の間で立ち上げられ、その際に保護林の駐在所の本拠地が RC 区に置かれた。この活動計画では郡の開発計画に国道 48 号線⁶⁰⁾の建設が含まれていた点が指摘され、国道の開設が新規移住者の増加と、それにとまなう農地開墾を招き、保護林の生態に影響を与え、管理費の増加を招くことが想定された [CCP and CI n. d.]。これに対応する上で RC 区に保全活動の拠点を置く必要があったと考えられる。実際に RC 区は国道 48 号線沿いの保護林検問所からバイク、または車に乗り約 1 時間で到着可能であり、保護林に隣接する行政区の中では国道から最もアクセスしやすい。

そして、トゥモロー・バーン郡の総合開発計画を支援する枠組みの中で、CI と森林局による保

58) OS 区の居住域は森林局管轄下の保護林内にあるが、土地利用範囲の一部は環境省管轄下のプノム・サモコス野生動物保護区にも重複する。

59) 2008年3月の現地調査では首都から OS 区への所要時間は車とバイクを乗り継いで約 7 時間を要した。

60) コック・コン州を通りタイ国境に向かう国道 48 号線は未整備の頃は途中の川を横断する橋が無く往來はフェリーを乗り継ぐ必要があった。タイ政府の贈与とローン資金により 2007 年末に道路舗装と橋の建設が完了して以降、首都～タイ国境の約 280 キロは 4 時間で移動可能になった [矢倉 2010: 19]。

護林周辺の行政区と保全協定を締結するプログラム（Conservation Stewards Program）が始まった。⁶¹⁾ このプログラムは住民が保全活動に参加することへの引換えに、活動に必要な資金と物資を各行政区に支給するもので、活動内容は違法伐採や密猟、農地開墾による森林減少を防ぐための監視、パトロール活動を中心とする。また、各行政区内で特徴的な生態環境がある場合は、それに応じた内容も協定に反映される [CI and FA 2007a; 2007b; Oum 2009]。

以上のように、北部では終戦直後の生活再建を重視する方針、南部では国道開発の影響を見据えた森林保護を重視する方針、という保全活動の方針の違いがあった。では、こうした相違はカルダモンの利用にどのような影響を与えたのだろうか。

4. 南部におけるカルダモンの復元と保護活動の影響——利用の控えと代替収入源の模索

保護林の設立後に行われた社会経済調査 [CI 2002: 13] によると、2002年には TTL 区と RC 区で食糧不足時⁶²⁾の食糧や現金収入源として非木材林産物が採取され、その一つとしてカルダモンの販売も行われていた（表 13）。また、RC 区では 2007 年頃までは、区内で商店を経営するコムポート州出身の区長が住民からカルダモンを買取っていたが、現在は買取りを止め、区長に実を売っていた K 村出身・在住の女性も 2007 年以来収穫を止めていた。

なぜ収穫と販売が中止されたのだろうか。

収穫中止の背景を考える上で、2007 年に RC 区のカルダモンの森の保護区域を設立する保全協定が結ばれたことに注目したい。この協定では、農地開墾によるカルダモンの森の減少を防

表 13 RC 区と TTL 区で収穫される林産物（2002 年）
（単位：家族数，複数回答可）

林産物の種類	RC 区	TTL 区
薬草類	4	6
レジン（樹脂類）	5	6
カルダモン	9	3
沈香	2	1
ハマビシ	0	1
野生イモ、キャッサバ、ヤムイモ	5	7
キノコ類	3	3
果樹類	7	3
食糧（不特定）	3	3

出所：[CI 2002: 13] をもとに筆者作成。

注：家族数は調査対象となった RC 区と TTL 区の各 13 家族中に占める数を表す。同時期の区全体の家族数は、RC 区 135 家族、TTL 区 101 家族。

61) 保護林に隣接する 6 行政区のうち 5 つはトゥモー・バーン郡内にある。郡内の 5 行政区との協定は 2006～07 年に結ばれ、残り 1 つの行政区 OS 区では 2008 年 11 月以降に協定が結ばれた。

62) 2002 年の RC 区、TTL 区のコメ収量は 350 kg /ha、8～9 月にコメが不足していた。当時のカンボジアの平均的な収量は 1,000 kg /ha [CI 2002: 8, 12]。

表 14 RC 区と TTL 区における山地民と移住者の割合 (2002 年)

区名	山地民の家族		移住者の家族		合計家族数
	家族数	割合 (%)	家族数	割合 (%)	
RC 区	42	31	93	69	135
TTL 区	90	89	11	11	101

出所：[CI 2002: 5] をもとに筆者作成。

注：表中の山地民と移住者は原文で“old” families, “new” families と記載され、両者の違いとして“old” families は先住性をもち土地法 (2001 年) と森林法 (2002 年) のもとで共同土地所有権と森林の慣習利用権が認められる人々に該当するとしている [CI 2002: 5]。

表 15 RC 区と TTL 区における人口変動 (2002 年, 2008 年)

区名	2002 年 12 月		2008 年 1 月		増加数	
	家族数	人口	家族数	人口	家族数	人口
RC 区	135	564	198	871	63	307
TTL 区	101	502	129	530	28	28

出所：CI への聞き取り及び、[CI 2002: 5] をもとに筆者作成。

ぐ必要性から、区域内の開墾禁止等が規定され [CI and FA 2007b], 具体的な活動として標識の設置、パトロール活動や苗植えによるカルダモンの森の復元が行われている。

保全協定はカルダモンの森の減少を防ぐ対策を重視しているが、これには RC 区の移住者の増加も関連するとみられる。例えば、RC 区の低地出身の家で移住理由を確認した 10 軒のうち、3 軒は農地獲得に関連する理由を挙げていた。また、RC 区では 2002 年の時点で移住者の家族数が 7 割近くを占め (表 14), 2002 年と 2008 年の人口を比較した場合も RC 区で顕著な増加がある (表 15)。

こうした背景からか、住民の中には収穫中止の理由に畑をするために森が開墾されてしまったことを挙げる人もいた (旧 RC 区出身 RC 区在住 50 代男性, TTL 区出身同区在住 50 代男性)。移住者の増加の背景には 2007 年に国道 48 号線が完成し、低地からアクセスがしやすくなった点も一因として考えられる。ただ、各家庭の移住理由は様々であり、戦時中の家財の喪失、低地の地価高騰、終戦後の山地での治安の安定化に対して低地での治安悪化などの理由も挙げられていた。

一方で、販売中止の理由の一つには外来の仲買人による地域産物の廉価購入が挙げられる。

RC 区の区長と K 村の住民によると、2007 年は区全体で約 100 家族が約 3 トンのカルダモンを収穫し、そのうち 1 トンを区長が住民から 10,000 リエル (2.5 ドル) /kg で買い取り、首都プノン・ベンに運び 3 ドル /kg で販売したという。この際の輸送費は確認できていないが、買値と売値の差額はさほど大きくはなく、住民が買い叩かれている印象はない。ただ、区長によると、タイからコック・コン州都を經由して来る外来の仲買人もいるという。外来の仲買人の 2007 年

の買値は未確認だが、2002年に仲買人が購入した TTL 区と RC 区の地域産物はコッ・コン州
都では 10 倍価格で取引されていた [CI 2002: 10]。

代替収入源となる換金農作物の普及も販売中止を後押ししている。RC 区の区長によると、
最近ではカルダモンに代わりトウモロコシ、バナナ、ピーナッツなどを売る人が多いという。
実際に 2008 年の調査時には RC 区でピーナッツ栽培が流行しており、区内の作物を調べた結
果、少なくとも 16 軒中、10 軒がピーナッツ栽培を行い、その価格は皮付きが 0.5 ~ 0.75 ドル /
kg、皮をとったものが 1.25 ~ 1.5 ドル /kg であった。また、「売れないから」と言ってカルダ
モンの販売を中止⁶³⁾した RC 区の山地民は、ピーナッツ栽培の流行理由を「売れるものを作る
ため」と説明していた。現金収入源の変化の背景には、農地開墾によるカルダモンの減少や、
保護林の規制が強まる中で、住民が新たな収入源を模索する動きとも読み取れる。

ただし、2009 年の調査では K 村に住みカルダモンの収穫と販売を行うプノン・ベンからの
移住者に会う機会があった。この住民は年間で約 100 kg を収穫して、自らコッ・コンの町に出
向き、収穫した実を 10,000 リエル (2.5 ドル) /kg で販売をしており、市場へのアクセスをもつ
ことが販売を可能にしていると見られる。このように、RC 区では過去にあった組合による共
同販売というよりも、個別的な販売が行われている。

一方で、販売は中止したが伝統薬として利用する例が RC 区では旧 RC 区出身の家が 1 軒、
TTL 区では同区出身の家が 1 軒と C 区 C 村出身の家が 1 軒あった。この中で旧 RC 区出身の
60 代男性は、カルダモンが昔に比べ少なくなったと言いつつも、森からもってきた苗を自宅の
庭に植えて利用を続けていた。

5. 北部における保全活動を通じた販売への支援と S 氏親族による儀礼実践との関係性

1) 保全活動を通じた販売活動への支援——終戦後の食糧不足への対応策

OS 区ではワニの保全活動を通じて区村の自然資源管理委員会を設立する支援がなされ、こ
の委員会のもとでカルダモンの販売活動が行われている。この活動が始まった背景は、終戦直
後の食糧不足に続き、改めて社会経済調査が行われた 2000 年代以降も住民が食糧難にあった
ことによる。例えば、2002 年 2 月のコメ不足月数は、調査対象となった 22 家族のうち 1 家族あ
たり平均約 7 カ月であった [Ironsides *et al.* 2002: 28]。

2001 年、OS 区の商店では州都から仕入れたコメが販売されていたが、雨季になるとアクセ
スが困難になる立地にあった点もありコメの価格は割高であった (当時のコメ価格はポーサッ
ト州都で 0.21 ~ 0.26 ドル /kg、OS 区で 0.41 ~ 0.51 ドル /kg)。住民はコメ購入用の現金収入
源の一つにカルダモンを売っていたが、仲買人の買値は約 4.62 ドル /kg であり、1 家族あたり

63) カルダモン販売時の価格は 0.6 ドルとの説明を受けたが正確な時期は不明。

約5～20 kg (23.1～92.4ドル相当)を収穫していた [Hamond and Hor 2002: 70, 73]。⁶⁴⁾

こうした背景のもと、2007年に始まった販売活動では、経済的に貧しい住民が食糧購入用の収入源を得られるよう、仲買人よりもカルダモンの買値を高く設定し、住民からは一律の価格で収穫した実を買取る試みが行われた。具体的には、FFIと森林局のワニ保全チームが委員会により買取られた実をプノン・ペン市場に運搬し、その売上がOS区住民に還元された。販売先にプノン・ペン市場が選ばれたのは、カンボジア各地の市場で買取り価格を調査した結果、プノン・ペンのバイヤーが最も高い金額を提示したことによる。

一方で、販売活動の開始後には、仲買人も買値を吊り上げ始めた。2007年、委員会を介した首都プノン・ペンでの売値は5ドル/kgであったが、OS区での仲買人の買値は2005年の1.5ドル/kgから2007年には2～3.25ドル/kgに上昇した [FFI 2009]。

上記の価格では委員会の買値の方が高いが、販売支援に関わる森林局職員とOS区住民によると、仲買人は実の辛味や成熟度合い見て品定めを行い、それにより各家庭に対して提示する金額も異なるという。したがって、実際には委員会よりも高額で買取られる例もあると考えられる。また、住民によると仲買人が委員会に先がけて買いに来る場合もあり、住民もより高い値段を提示した方を販売相手に選ぶ場合もあるという。

こうして、販売への支援とともに、委員会と仲買人の間に競合関係が生じた過程でOS区のカルダモン価格は上昇した (表16)。⁶⁵⁾

表16 OS区産のカルダモンの実1kg当りの価格推移 (2001～09年)

販売先	収穫年別の価格の推移					
	2001年	2002年	2005年	2007年	2008年	2009年
OS区内	4.62	2～2.5 (8,000～10,000)	1.5 (6,000)	2～3.25 (8,000～13,000)	3.75～5 (15,000～20,000)	2.5～3.75 (10,000～15,000)
首都プノン・ペン	—	—	—	5 (20,000)	4～7 (16,000～24,000)	—

出所：[FFI 2009; Ironside *et al.* 2002; Hammond and Hor 2002; Hot 2008] および、FFI、森林局職員への聞き取りより筆者作成。

注1：価格単位はドル、括弧内はカンボジア・リエル。

注2：2003～04年、2006年および傍線部の価格は不明。

注3：2001年の価格は実際は100～180バーツで買い取られていたものをドル換算で表示。

64) 1家族あたりが必要としたコメの量は不明だが、当時のOS区の水田のコメ収量は300 kg/ha、カンボジア国内の水田の平均的なコメ収量は1,000 kg/haであった [Hammond and Hor 2002: 78]。

65) FFI職員によると、2008年はタイ-カンボジア国境にあるブレア・ヴィヒア寺院の掃属先をめぐる国境で武力衝突が発生し、タイがカンボジア製品の購入を中止した影響で、プノン・ペン経由でタイに流通していたカルダモンの物流が断たれ、2007～08年の約5ドル/kgから2008～09年は約4ドル/kgに価格が下落した。ただ、2008年の生産量の一部はプノン・ペンの展示会で外国人向けに6～7ドル/kgで販売された。2008年は農業支援を行うローカルNGOも販売支援の一部を担当した。

表 17 OS 区各村のピーナッツ栽培家族数とカルダモン収穫家族数の割合（2008 年 10 月）

村名	CL 村	K 村	OS 村	KCR 村
各村の家族数	83	32	63	70
調査対象家族数	25	10	19	20
ピーナッツを栽培する家族数の割合	72%	80%	95%	40%
カルダモンを収穫した家族数の割合	56%	90%	74%	85%

出所：[Hot 2008: 5-8] をもとに筆者作成。

注 1：2008 年 10 月に OS 区 248 家族中 74 家族を対象に行われた調査に基づく。

注 2：当時の村内でのピーナッツの売値は 0.7～1 ドル/kg。

ところで、2008 年には OS 区でも換金農作物としてピーナッツ栽培が流行していた。同年 10 月に区内全 248 家族のうち 74 家族を対象に行われた社会経済調査によると、各村でピーナッツを栽培する家族数の割合は 40～95% であったが、一方でカルダモンの収穫に参加した家族数の割合は 56～95% であった（表 17）。

注目すべきは RC 区と異なり、OS 区ではピーナッツ栽培と並存してカルダモンが販売されている点である。これには 2007 年の OS 区のコメの不足期間が平均 5 カ月であった点も関連すると考えられる [loc. cit.]。つまり、近年も食糧購入用の現金収入源としてカルダモンが重要な位置を占めていることが理由として考えられる。

実際にどの程度の食糧が買えるのだろうか。住民の主食となる精米を例に考えたい。2009 年時、OS 区内では精米 1 袋分 (50 kg) が 12 万リエル (30 ドル) で売られていた。一方、2007～09 年のカルダモンの価格は 2～5 ドル/kg であり、一家族あたりの採取量は 5～50 kg 以上、つまり多い場合は精米 3～8 袋分を購入できる量に相当した。

2) S 氏親族による祭司役割の後継と販売活動の相互関係

OS 区では収穫前の儀礼も続けられてきた。その理由の一つに FFI と森林局のチームから、ロウソクやブタなど儀礼用の供物を調達する支援があった点が挙げられる。しかし、外部からの支援のみでは、地域内で儀礼が続けられてきたことの説明にはならない。この背景を考える上で、終戦前に S 氏のもとで儀礼が再開されていたことを改めて確認しておく必要がある。S 氏が死後に守護霊化された点は既に述べた。では、S 氏の死後、カルダモンの儀礼の担い手は誰が受け継いだのだろうか。

S 氏の死後に祭司役割を後継したのは S 氏の親族であった。具体的には、S 氏の従弟が儀礼の執行役を担い、S 氏の甥が儀礼時に霊を呼ぶ寄り代となり、S 氏の義理の息子は儀礼の準備に責任をもつ立場にある。その中でも S 氏の従弟は過去にも S 氏の代役として林産物収穫の統率を経験した人物でもあった。さらに、S 氏の義理の息子は保全活動の参加を通じてカルダモンの販売活動の運営にも関わっている。⁶⁶⁾

66) S 氏の義理の息子はカルダモンに関わる仕事の中心を担っており、彼の家も S 氏の祠の近くにある。↗

OS区では現在も儀礼による収穫の解禁前に実を取ることは「盗み」とみなされるが、重要なのは、儀礼と販売が密接に関連する点にある。なぜなら、カルダモンの価格は実の成熟度合いに左右されるが、儀礼は実の成熟後に行われる点で、高値で販売可能な実を収穫するための仕組みを備えていると考えられるからである。実際に、2002年時、未熟の実が通常の実に比べて安値の0.375～0.75ドル/kg(1,500～3,000リエル)であり、未熟の実が市場に出回ると成熟を待って収穫された実の価格も下落すると指摘されていた [Ironsides *et al.* 2002: 41]。また、S氏の義理の息子も実の成熟度を確認した上で儀礼日程を決めており、未熟の実が多いうちは収穫すべきではなく、未熟の実が売られると自分たちの「名を汚す」ことになるとも話していた。

OS区産の実が昔よりも生産量が減り、質が低下したとする指摘もある [loc. cit.]。これは1970年代以降の戦乱で利用が中断された影響の一つとも捉えられる。しかし、儀礼の再開により収穫を解禁する慣習が続けられたことは、実の質を一定程度まで高め、高値で実を販売できるよう収穫時期を調整する仕組み実現させたと考えられる点で注目に値する。

こうして、OS区では収穫、儀礼、販売が続けられてきた。だが、その地域状況は大きく変化し始めており、今後もカルダモンの利用が続くかどうか先行きが見えない事態も生じている。

6. 北部における地域状況の変化のなかでのS氏親族の祭司役割の揺らぎ

2009年以降、OS区では水力発電ダム開発計画のもと貯水池を整備するために森林伐採が合法化された。これにともない、伐採活動で現金を得るために全国各地から人が集まり、住民の中にも木材売買に関与する例が出始めている。

こうした動きの中で、カルダモンの収穫に参加する住民も大幅に減り、2008年は100家族以上により約2,000kgが収穫されたが、2009年は約57家族による約1,000kgの収穫に減少した (FFI職員、区長、区の森林保護組合長に確認)。

収穫者減少の理由を住民に聞くと、農業、学校教員、行政、保全活動の仕事が忙しい等の理由に加え、より高額で販売可能な木材の伐採・運送・売買の流行も理由に挙げられていた。

実が熟する前の盗みや、動物による食害が増えていることも、生産量減少の背景として説明されていた。「なぜ盗みが増えているのか？」と筆者が区の集会で質問するとS氏の義理の息子と区役員は「外来者が増えている」「外から来る人は地元の慣習や伝統を知らないから」と説明した。また、旧RC区出身の区長は、「慣習が昔のように忠実に守られてない」とし、その理由は「二度の戦争で何もかも失われたから」だという。

一方、従来とは別の方法でカルダモンを利用する動きもある。2009年に聞き取りをした旧

↙ ドンカウの系譜の詳細な検討は必要だが、役割の継承条件や、S氏親族が祭司役割を後継した点から判断するに、同一親族が後継者になるようである。S氏親族は森林局職員から「一族を継ぐ人 (neak snong trokol)」とも呼ばれていた。

RC 区出身の 40 代男性は、2 年ほど前に森の中で販売用の実を収穫した際にとってきた種を自宅の庭に植えていた。自家用の食材と薬草のための少量の栽培だが、これを始めたのは「最近では森で畑を切り開く人が多く、伐採活動が行われ実をあまり収穫できないから」だという。

S 氏親族のカルダモンへの関わり方も変化している。S 氏の甥は 2009 年から儀礼の参加と収穫をやめ、木材の伐採で収入を得はじめた。また、S 氏の従弟は「盗み」が増えていることを理由に収穫を控え、森の中での収穫の統率もしていない。収穫も昔のように大きな集団ではなく、近所同士の家が誘い合って行う。そして、S 氏の義理の息子は複数の団体の保全活動への参加と農業の兼務が多忙のため、販売活動の運営には関わることが、2009 年時点で過去 2 年は収穫に参加していなかった。

こうした変化のなか、S 氏親族を含めて住民は口を揃えて「現在はドンカウはいない」という。⁶⁷⁾ ただ、S 氏の従弟は現在も儀礼執行を担当しており、その役割は「コムナン」と呼ばれ維持されている。⁶⁸⁾ そして、儀礼時の霊の寄り代は、現在は S 氏の義理の息子がその役目を務め、彼は収穫には参加できていないものの、カルダモンの儀礼を始めとする祭礼を S 氏から受け継いだ「チョーンの民族の伝統・慣習」と繰り返し説き、儀礼そのものは重視する姿勢を見せていた。

このように、OS 区では地域状況の変化とともに S 氏親族の影響力も揺らぎ始めている。

VI 考 察

カルダモン山脈の地名はカンボジアでカルダモンが最も多く分布するとされてきたことに由来した。しかし、山脈のカルダモンの分布域に着目してわかり得たのは、「名産地の北部」と「もともとは分布の少なかった南部」という分布の偏在性であり、それは現在のみならず植民地期にまでさかのぼることができた。これは、ドンカウ S 氏を輩出した北部と植栽の歴史とともに利用がなされた南部という違いにも表れていた。

その意味では、カルダモンを豊富に産出した北部は南部に比べて現場の知識と経験の蓄積があり、これが利用を続ける上での土台となったと考えられる。その知識と経験は、儀礼と収穫を統率したドンカウを通じて蓄積されてきたが、それを可能にしたのは現場への関わりの深さ、親族間での役割の継承、実の品質調整、という特質を備えた役割にあった。

67) この件を「現在もドンカウはいる」と話した現場経験の長い森林局職員に確認したところ「かつては儀礼時に霊が憑依した S 氏をドンカウと呼び、今も S 氏の親族に儀礼時に霊が憑依するので今もドンカウはいると考えていたが、昔のように解禁前に実を盗んだ人を処罰したり、森の中で収穫する集団を統率する権利が無いので、住民は『ドンカウはいない』と言いたいのだろう」とのことだった。

68) S 氏の従弟によると「儀礼をするのはドンカウでも、コムナンでもよい」という。

1. ドンカウの役割の特質

現場への関わりの深さ：ドンカウが実の生育過程と成熟状況を把握するために、収穫時のみならず、収穫前も現場に出向く役割であったことは、現場の知識や経験を深めることにも繋がったであろう。現場への関わりの深さや近さは、裏を返せば、中央政府からの地理的、政治的な距離の遠さをも意味し、旧体制の廃止後も植民地政府の支配体制から遠く手の届かぬところで、その役割が存続することを可能にした。

親族間での役割の継承：ドンカウが現場に深く関わられたのは、S氏もそうであったように役割の担当者自身が山地民だからであった。そして、個人のみならず、同じ親族、民族という後継条件をもつ世襲制は、後代まで現場の知識と経験を伝えることを可能にした。S氏の例で重要なのは、S氏死後に初めて役割が後継されたのではなく、儀礼執行を担当するS氏の従弟は戦前よりS氏不在時に収穫の統率を代行したこともあり、過去の経験に裏付けられた経歴をもつ者が役割を後継した点である。

実の品質調整：ドンカウが現場で得た知識と経験の中で販売との関係において重要であったのは実の品質調整に関わるものであった。早熟の実の「盗み」を防ぎ、その成熟状況を見極めて収穫時期を判断し、儀礼を経て収穫を解禁したことは、良質の実を産出する生育環境を維持し、実の商業的価値を高める生産地のしくみとして機能したと考えられるからだ。この活動の蓄積が北部産の実を一級品質にまで高め、名産地としての評判を呼び販売を続ける上での要件となった。

これは、従来は別々に論じられてきた儀礼と販売制度が実際は相互に関連し合うものであったことを示す。そして、中央政府がカルダモンを国の財源と位置づけ販売制度の整備とともに積極的に販売する必要が生じたこと、仲買人と価格交渉を有利に行うための組合のもと現金収入の機会が増えたことも、ドンカウの存続とは無縁ではなかつただろう。ただし、それは植民地政府が廃止したはずの旧体制の仕組みと、植民地政府が新設した販売制度とが組み合わせられて実現した点で、新旧体制の絶妙な組み合わせのもと創出されたといってよい。そして、この体制下で実の生産量を増やす動きとともに北部から南部への植栽が行われた。それは、カルダモンを中央と地方をとり結ぶ交易品・貢納品と位置づけてきた従来の見方に加え、その分布の偏在が山脈内の地域を結ぶ交流も生んだ可能性を示唆した点で、カルダモン交易への視点に再考を迫るものであった。

2. 南部における収穫現場の統率役と郡知事の非連続性 —— 知識と経験の蓄積・継承への制約

しかし、南部では北部から植栽が行われるまでカルダモンの分布が限られていたことは、現場の知識と経験の蓄積の制約にもなったと考えられる。

また、南部で影響力をもっていた郡知事は、区長を介して郡全体の収穫や売買を統制した点で、組織上の権限は強かったと考えられる。しかし、それは逆に言えば、郡知事自身が現場活動を通じて経験と知識を得る機会は限られていたことをも意味する。これは、南部でも1950～60年代までは収穫と儀礼の統率者がいた事実や、現場に近いところでの実務は区長が担っていた事実からも裏付けられる。

しかし、儀礼と収穫の統率者は親族間での世襲はあったものの、後継者難により1950～60年代には世襲が終えられていた。これに重なる時期に郡知事が収穫と販売の主導権を握ったが、その役割は世襲が終えられた統率者の後を継ぐものではなかった。そして、郡知事が祭司とは異なり公職にあり、郡が国境に接していた地理条件から軍人でもあった可能性があったことは、内戦の始まりとともに、その失脚をも早めたであろう。そうした意味で、南部では収穫に影響力をもった役割に連続性がなく、これが現場の知識と経験を後代に伝える上での障壁となったのではないかと考えられる。ただ、郡知事と収穫の統率者の盛衰の因果関係は本論で論じきれなかった点で、各地で収穫に影響力をもった主体や収穫の統率者間の関係性はさらに検討を要する。⁶⁹⁾

また、儀礼による収穫の解禁が1970年代に中断されて以降、再開されなかったことは、実の品質への商業上の価値にも影響を与えたと思われる。

3. 北部でドンカウを担ったS氏の個人の資質

ドンカウの役割の特質に加えて、それを実際に担ったS氏個人の資質は1970年代前後を通してカルダモンの利用が続く上での重要な要因となった。ドンカウを務める者は知識に長けていることが求められたが、S氏もカルダモンの儀礼だけでなく、仏教のほか幅広い分野に精通した有能な人物として社会的に承認される下地を築いていた。

その下地を活かす形で戦災避難と社会復興を主導したことが、1970年代以降の経験で離別した山地出身者間の解体された社会的紐帯を再統合することに繋がり、その活動がその他の住民から評価され、S氏死後も住民が収穫と儀礼を続ける動機になったのではないかと考えられる。これは、S氏がOS区の新たな祭司となり、その死後には守護霊化されたこと、S氏から継承された祭事が「チョーンの民族の伝統・慣習」と理解され、S氏親族が祭司役割を後継した点にも表れていた。

4. 保全活動を通じた販売支援との関わりにおけるドンカウの役割の意義

終戦前後の時期には、ドンカウの存在に加え、地理・政治状況、保全活動を通じた外部社会

69) K村の収穫の統率者の後継者難は、それに代わる形で郡知事の影響力に繋がったと考えられるが両者の因果関係を示す事実関係は不明。また、TTL区の収穫の統率者の詳細は未確認のため、これらの詳細は今後の検討課題とする。

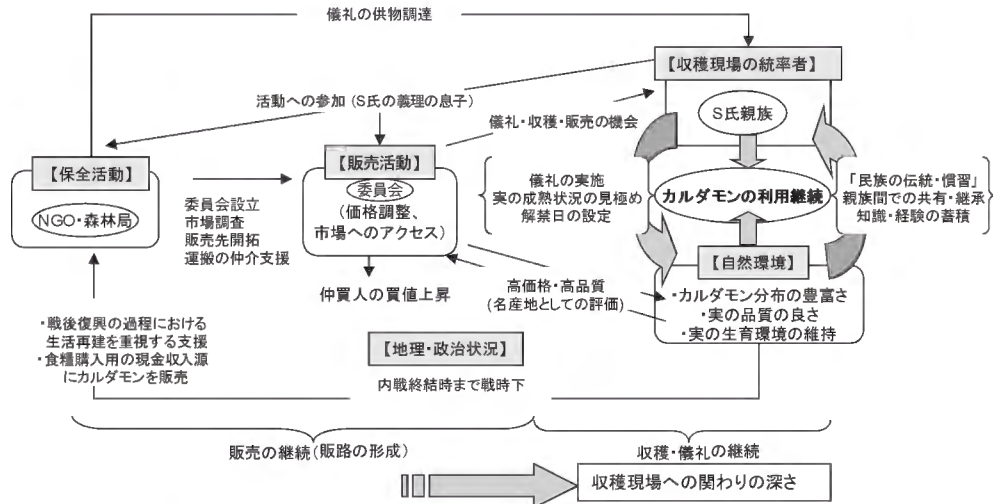


図5 北部（OS区）におけるカルダモンの利用継続の要因間の関係

出所：筆者作成。

との関係、自然環境など複数の要因が交差して、北部のカルダモンの利用継続を左右した（図5）。

まず、内戦終結時まで戦時下にあった地理・政治状況は、戦後復興の過程で始まった保全活動を、住民の生活再建を重視する方針へと導き、さらに、食糧難にあった住民が食糧購入用の現金収入源にカルダモンを売っていたことを汲む形で販売活動の支援へと導いた。

そして、S氏親族による儀礼実施、販売活動への参加と、NGO・森林局による儀礼用供物の調達、委員会設立、市場調査、販売先開拓、運搬の仲介支援が相互に関連し合い、カルダモンの流通に関わる地域内外の主体が連携するなかで、生産地から販売先への販路が形成された。これを通じて、高値で販売するための価格調整の仕組みが整えられ、市場へのアクセスが確保された。また、販売活動に付随して仲買人が買値を吊り上げたことは、地域内で産出される実の市場価格を底上げし、販売の継続を後押しした。ポル・ポト政権期の市場・貨幣経済の否定で分断されたカルダモンの流通はこうして再興されてきた。⁷⁰⁾

ここで重要なのは、収穫現場の統率を担ったS氏親族が儀礼と販売を通じ地域内外をつなぐ役割を果たした点である。内戦の長期化は収穫機会の制限から実の質の劣化を招いた制約はあったものの、儀礼の再開は、カルダモンが豊富に分布する北部の自然環境のもと、実が熟し

70) OS区-首都間の国内市場の販路は整備されたが、植民地期にあったカンボジア-香港の国際的な販路は1970年代に海外との交易関係が分断されてから再開されていないようである。現在はカンボジアからベトナム、タイを経由して中国にカルダモンが輸出されているとされ、最終消費国との国際的な流通・交易関係の再整備は今後の課題となる。

てから収穫する仕組みを再興させた。儀礼後の収穫解禁は、住民間の収穫機会を同じくすることで地域内の実の生育環境を維持し、その質と価格を保証する効果もあった。

そして、S氏の義理の息子が儀礼の準備と同時に販売活動の運営に関与したことは、地域の内側から、販売を行う住民と、外部から支援を行うNGOや森林局を仲介することを意味した。販売活動は住民が売買の機会を共有する場をも提供したといえる。

さらに、S氏から受け継いだ儀礼を「民族の伝統・慣習」として、経済的価値のみに還元しない価値を住民が見出していたことがOS区で儀礼、収穫、販売、それぞれが続けられてきた重要な要因となったと考えられる。⁷¹⁾

一方、南部では内戦の終息時期が比較的早く、これが企業による商業伐採の参入をしやすくし、同時に国道開発による移住者の増加と農地拡大の影響を受けやすい立地にあった点が、保全活動を外部要因からの森林減少の防止策を重視する方針へと導いた。

加えて、1970年代以降は収穫の統率者や販売制度を欠き、利用を続けるための基盤となる仕組みが再興されない条件下で、外来の仲買人による廉価購入や、代替収入源としての換金作物の普及とともに、収穫と販売の機会が個別化し、利用の控え、または中止へと至った。

5. S氏親族の影響力の揺らぎの要因と祭司役割の存続への柔軟な対応

しかし、カルダモンの利用が続いてきた北部でもダム開発にともなう森林伐採とともに、外来者による実の「盗み」が増え、収穫者が減少する中でS氏親族の影響力は揺らいでいた。

外来者による解禁日を守らない実の「盗み」の増加は、販売活動による実の価格上昇が誘発した影響の一つとも捉えられる。つまり、販売活動の初期段階では地域経済が活性化されたが、価格上昇にともない儀礼による収穫の解禁を守る住民と、外来者との間で慣習の実践と資源へのアクセスをめぐる価値観に緊張関係が生じたともいえる。また、慣習が実践されない、守られないこと背景には、長年続いた戦乱の影響による社会規範の変化や、ダム開発の開始など複数の要因が混在しているであろう。

しかし、これをドンカウの役割に視点を置いて考えるならば、S氏親族のカルダモンの収穫過程への関与の度合いが変化し、少なくなりつつあることが、その他の住民からの信頼を失い、過去のように慣習を行使するのを難しくしているとも考えられる。これは、S氏親族を含めた住民が「現在はドンカウはいない」と話していたことにも表れていた。

71) 森林局職員によると、ボル・ポト政権期の民族同化政策の影響でNGOがOS区で活動を始めた当初、住民は民族名を聞かれると「クメール」と答え、NGOが「今はボル・ポト時代とは違う」「NGOが来たのは先住民を支援するため」と説明する過程で住民は民族名を「チョーン」と言うようになったという。その意味では住民が「民族の伝統・慣習」を強調する背景には、外部からの支援者との関係を意識し、自らの民族を表明することで外部との関係を維持しようとする姿勢を表しているとも捉えられる。

ただし、S氏の従弟と義理の息子は儀礼と販売活動に関わることで、収穫前後の過程に一定の関与は続けていた。とくに、S氏の甥に代わり義理の息子が儀礼時の寄り代を務めた点は、かつてS氏の不在時にその従弟が収穫の統率を代行したことも通じるような状況の変化に柔軟に対応する姿勢がみられる。そこには、自らの立場が危うくなりつつも、何とかしてS氏から受け継いだ「民族の伝統・慣習」を続けようとする意思も垣間見られた。つまり、逆説的ではあるが、地域状況の変化とともに影響力が揺らいでいることがカルダモンの利用を続ける上での危機感となり、S氏から受け継いだ「民族の伝統・慣習」を続けようとする姿勢に繋がっているのではないか。

VII 結 語

本論の目的は近現代のカンボジアの社会変動の過程でカルダモン山脈におけるカルダモンの利用のあり方に変化と地域差が生じた歴史的・社会的背景を、カルダモンをめぐる地域環境史の動態から解明し、カルダモンの利用継続を左右した要因を考察することであった。

結論として、(1) 収穫現場の統率役のドンカウの役割の特質が、カルダモンを豊富に産出した北部の自然環境と相互に作用し合い儀礼、収穫、販売を行うための基盤となる仕組みが地域内部に形成・蓄積されてきたこと、(2) それを担ったS氏親族が内戦と政治的混乱を経た社会変動の波の中でも、柔軟な対応をもって儀礼、収穫、販売の仕組みを再興・維持してきたこと、この2点がカルダモンの利用を続ける上での要諦を成してきたといえる。(3) それを補強する形で、外部から導入された販売制度や保全活動が地域内の仕組みと相互に関連し合うことで、販売を介して地域内外の関係を維持する仕組みが築かれてきた。

外部社会との接触を通じた社会の変化に柔軟に対応して伝統的権威を維持しようとする姿勢は、それ自体に権威の揺らぎやすさ、危うさを含む一方で、状況の変化は慣習に新たな意味を与え再活性化させる可能性もあるとされる〔中田2004〕⁷²⁾。それは、近年の地域状況の急激な変化とともに、S氏親族の収穫過程への関与度合いが変化し、その影響力が揺らぐ中でも、S氏親族が祭司役割の立場を維持し、収穫はやめても儀礼と販売を通じてカルダモンとの関わりを続けていた点にも表れていた。

そうした、カルダモンへの関わり方の模索過程には、単純に利用の「継続か」「中止か」とい

72) 中田による南ラオスの守護霊祭祀の研究では、国家を含む外部社会との接触による村落社会の変化に柔軟に対応して長老や村長が伝統的権威を維持しようとする動きが述べられる。そして、そうした対応を必要とすること自体に何らかの出来事により揺らぎかねない権威の危うさがある一方で、伝統の名のもとで実践される慣習は社会・経済・政治的状況に応じて新旧の要素を取捨選択しながら行われる点で、状況の変化は慣習に新たな意味を与え再活性化する可能性があるとしている〔中田2004: 100-102〕。

う二分法では捉えられない、より複雑な関わり方の多様性といえるものが見られる。そうして、S氏親族が地域状況の急激な変化に柔軟に対応してきた姿勢は、自然環境管理のための社会的しくみを一元化することなく、地域や時代の状況に合わせて試行錯誤しながら変化させていく順応的管理の一形態とも捉えられよう [宮内 2009]。⁷³⁾

状況の変化への柔軟な姿勢は、S氏親族のみならず北部と南部の両地域で、森林伐採や農地拡大が進む中で、従来は森の中で販売用にカルダモンを収穫していたが、現在は自家消費用に自宅の庭で栽培を始めた住民の例にも表れていた。こうした意味でも、社会の変化に対応しつつ模索される、収穫、用途、利用の過程や方法に見られる、関わり方の多様性を理解する視点が求められる。

そうした、多様性を追究するには地域を捉える視点も改める必要がある。本論では山脈のあらゆるところにカルダモンがあったわけではなく、植生の分布域に応じて収穫地に向く場合や、分布が豊富な地域からの植栽による利用の試み、また南北の地域間だけでなく、各地域内でも分布域に差があったことを指摘したが、それによる地域内部での利用の多様性の詳細かつ具体的な解明には至らなかった。

これは「北部」「南部」という視点の限界を示すものであり、今後はよりローカルなレベルでの、村落内や村落間での利用動向への理解が必要になる。そして、住民にとってのカルダモンやドンカウの存在の重要性の程度を、その他の生業や慣習の中で相対的に位置づけるとともに、状況の変化に対応する模索のあり様や、地域に内在する資源利用の仕組みの動態を理解し、その過程で保全活動を通じた外部からの支援が地域社会にどのように関わりうるのかを考えることが今後の課題として求められる。

謝 辞

現地調査の一部は財団法人 松下幸之助記念財団の研究助成を得て実現した。RC区、TTL区、OS区の人々、森林局、CI、FFIの方々から現地調査の受入れを始め、調査を円滑に進める上で様々な面でご協力頂いた。匿名の査読者の方々には、本論の議論を充実させ、考察を深める上で貴重なコメントとともに重要文献をご紹介頂いた。論文執筆にあたっては、筆者の所属する東京大学国際森林環境学研究室の教員（井上真氏、田中求氏）および大学院生の皆様から、ゼミでの議論を通じて考察を整理する上で数々の有益な助言を頂いた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

73) 宮内は「順応的管理」を(1)人間と自然の関係の柔軟で多様な関わりを復権するための社会的合意に基づく柔軟な自然環境管理の方法、(2)それらに関わる、人間と人間の関係や、社会のしくみの順応性、社会的な価値の多元性をも視野に入れたものとして論じている [宮内 2009: 127-130]。

参考文献

略号

ANC: Archives Nationales du Cambodge
 BEFEO: Bulletin de École Française d'Extrême-Orient
 CCP: Cardamom Conservation Program
 DFW: Department of Forestry and Wildlife
 FA: Forestry Administration
 IEO: Imprimerie d'Extrême-Orient
 IS: Imprimerie Saigonaise
 RSC: Résidence Supérieur du Cambodge

邦語文献

- アジア経済研究所. 2009. 『アジア動向年報』アジア経済研究所.
 天川直子. 2001. 「カンボジアにおける国民国家形成と国家の担い手をめぐる紛争」『カンボジアの復興・開発』天川直子(編), 21-65 ページ所収. アジア経済研究所.
 ————. 2006. 「政治の安定を目指して——総選挙と憲法改正」『カンボジアを知るための60章』上田広美; 岡田知子(編), 209-213 ページ所収. 明石書店.
 岡田知子. 2006. 「インドシナの枠組みの中で——フランス植民地期」『カンボジアを知るための60章』上田広美, 岡田知子(編), 173-177 ページ所収. 明石書店.
 北川香子. 2006. 『カンボジア史再考』連合出版.
 ギュイヨ, ルシアン. 1987. 『香辛料の世界史』池崎一郎ほか(訳). 白水社.
 小林 知. 2005. 「カンボジア, トンレサップ湖東岸地域農村における集落の解体と再編——一村落社会の1970年以降の歴史経験の検証」『東南アジア研究』43(2): 273-302.
 坂本恭章. 2001. 『カンボジア語辞典』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 志間俊弘. 2006. 「カンボジアの違法伐採と土地問題」『熱帯林業』65: 17-24.
 周達観. 1989. 『真臘風土記——アンコール期のカンボジア』和田久徳(訳注). 平凡社.
 高橋宏明. 1997. 「フランス植民地時代前半期のカンボジアにおける政治社会変化——伝統的政治社会体制の変革過程を中心に」『中央大学アジア史研究』21: 28-54.
 ————. 2001. 「近現代カンボジアにおける中央・地方行政制度の形成過程と政治主体」『カンボジアの復興・開発』天川直子(編), 67-110 ページ所収. アジア経済研究所.
 高橋美和. 2006. 「復活した信仰——内戦後の仏教の復興」『カンボジアを知るための60章』上田広美; 岡田知子(編), 84-88 ページ所収. 明石書店.
 ————. 2009. 「出家と在家の境界——カンボジア仏教寺院における俗人女性修行者」『境界』の宗教実践——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』林行夫(編), 359-409 ページ所収. 京都大学学術出版会.
 塚本重光. 1999. 「カンボディア王国の農林水産業の概要」『日本クメール学研究会会報』2: 3-20.
 中田友子. 2004. 「南ラオスの民族混住村における水牛供犠祭り」『東南アジア研究』42(1): 74-102.
 宮内泰介. 2009. 「半栽培の多様性と社会の多様性——順応的な管理へ」『半栽培の環境社会学——これからの人と自然』, 118-131 ページ所収. 昭和堂.
 矢倉研二郎. 2008. 『カンボジア農村の貧困と格差拡大』昭和堂.
 ————. 2010. 「タイ・カンボジア国境」『アジア研ワールド・トレンド』172: 19-22.
 吉田憲悟. 2001. 「カンボジアの森林の現状と課題」『熱帯林業』50: 3-12.

欧語文献

- Aubertin, Catherine. 2004. Cardamom (*Amomum* spp.) in Lao PDR: The Hazardous Future of and Agroforest System Product. In *Forest Products, Livelihoods and Conservation Case Studies of Non-Timber Forest Product Systems* Vol. 1: Asia, edited by Koen Kusters and Brian Belcher, pp. 43-60. Bogor: Center for International Forestry Research.
 Aymonier, Étienne. 1900. *Le Cambodge I: Le royaume actuel*. Paris: Ernest Leroux.
 ————. 1901. *Le Cambodge II: Les provinces siamoises*. Paris: Ernest Leroux.

- Baradat, R. 1941. Les Sâmré ou Peâr, population primitive de l'Ouest du Cambodge. *BEFEO* 41: 1–101.
- Clarke, Gerard. 2001. From Ethnocide to Ethnodevelopment? Ethnic Minorities and Indigenous Peoples in Southeast Asia. *Third World Quarterly* 22(3): 413–437.
- Cleary, Mark. 2005. Managing the Forest in Colonial Indochina c. 1900–1940. *Modern Asian Studies* 39 (2): 257–283.
- Forest, Alain. 1980. *Le Cambodge et la colonisation française: Histoire d'une colonisation sans heurts (1897–1920)*. Paris: L'Harmattan.
- IS. 1906. *Géographie physique. économique et historique du Royaume du Cambodge, 1er Fascicule Monographie de la province de Pursat*. Saigon: IS.
- Isara, Choosri. 2002. Dialects of Chong. *The Mon-Khmer Studies Journal* 32: 55–70.
- Lavit Kham. 2004. *Medicinal Plants of Cambodia Habitat, Chemical Constituents and Ethnobotanical Uses*. Australia: Bendigo Scientific Press.
- Martin, Marie Alexandrine. 1971. *Introduction à l'ethnobotanique du Cambodge*. Paris: Éditions du Centre national de la recherche scientifique.
- . 1976. Les rites de cueillets au Cambodge. *Journal d'Agriculture Tropicale et de Botanique Appliquée* 23(7–12): 205–220.
- . 1997. *Les Khmers Daeum, "Khmers de l'origine": Société montagnarde et exploitation de la forêt : de l'écologie à l'histoire*. Paris: Presses de l'École française d'Extrême-Orient.
- Morizon, René. 1936. *La province cambodgienne de Pursat*. Paris: Les Éditions internationales.
- Moura, J. 1883. *Le Royaume du Cambodge*. Paris: Ernest Leroux.
- Oum, Sony. 2009. A Comparative Study of Incentive Schemes for Crocodile Conservation in the Cardamom Mountains, South-West Cambodia. Phnom Penh: A Thesis (Research Report). In partial fulfilment of the Requirement for the Degree of Master of Science in Biodiversity Conservation, Royal University of Phnom Penh.
- Sharma, E.; Sharma, R.; Singh, K. K.; and Sharma, G. 2000. A Boon for Mountain Populations: Large Cardamom Farming in the Sikkim Himalaya. *Mountain Research and Development* 20(2): 108–111.
- Sharma, R.; Xu J.; and Sharma, G. 2007. Traditional Agroforestry in the Eastern Himalayan Region: Land Management System Supporting Ecosystem Services. *Tropical Ecology* 48(2): 189–200.
- Steinberg, David J. 1959. *Cambodia: Its People, Its Society, Its Culture*. New Haven: HRAF Press.
- Thuon Ratha; Kheang Seangly; Oeurn Pangnavit; and Kim Thavy. 2009. How Do Local Knowledge Systems Contribute to Biodiversity Conservation? A Case Study in O'Som Commune, Veal Veng District, Pursat Province (Ka Prauprah chomneah Dng Mulattan roboh Prochiecwon knong Ka Apheriak Chivi chomroh; Kanei Seksa phum OuSaom nung Kieng Chung Rok khum OuSaom srok Veal Veng khaet Pursat). BSC Thesis submitted to Department of Environmental Science, Royal University of Phnom Penh.
- Watson, Ernest. [1930] 1941. *The Principal Articles of Chinese Commerce (Import and Export)*. 2nd edition. Reprinted. Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs.
- NGO 報告書
- CCP and CI. n. d. *To Declare the Central Cardamoms Protected Forest*. DFW, and Ministry of Agriculture, Forestry, and Fisheries.
- CI. 2002. *Report on Village Surveys in the Thma Bang and Tatai Leu Areas, December 2002, Central Cardamoms Protected Forest (CCPF)*. Internal draft report. Phnom Penh: CI Cambodia Program.
- . 2004. *Report on Participatory Rural Appraisal and Transect Walk for Participatory Land Use Planning (PLUP) in TaTai Leu Commune (Thma Bang District, Koh Kong Province)*. Phnom Penh: CI.
- CI and FA. 2007a. *Central Cardamom Protected Forest Annual Report (July 2006–June 2007)*. Phnom Penh: CI and FA.
- . 2007b. *Central Cardamom Protected Forest Conservation Program, Incentive Agreement Thmar Bang District, Koh Kong Province*. Phnom Penh: CI and FA.
- Daltry, Jenny C., ed. 2002. *Social and Ecological Surveys of the Veal Veng Wetland, Cardamom*

- Mountains, Cambodia, With Special Reference to the Siamese Crocodile*. Phnom Penh: FFI Cambodia Programme
- Daltry, J. C.; and Momberg, F., eds. 2000. *Cardamom Mountains Biodiversity Survey*. Cambridge, UK: FFI.
- FFI. 2008. Livelihoods and Conservation in O'Som Commune, Cardamom Mountains, Cambodia. In *A Compendium of Case Studies, Lessons & Recommendations Sharing FFIs Experiences of Linking Biodiversity Conservation & Human Needs*, edited by FFI, pp. 37–40.
- . 2009. *The O'Som Cardamoms: A Case Study from Chong Indigenous Group*. Unpublished FFI report.
- Hammond, B.; and Hor, Leng. 2002. Socio-economics, Natural Resource Use and Human Needs in O'Som Commune, Veal Veng District, Pursat Province, Cambodia. In *Social and Ecological Surveys of the Veal Veng Wetland, Cardamom Mountains, Cambodia, with Special Reference to the Conservation of the Siamese Crocodile*, edited by J. C. Daltry, pp. 61–86. Phnom Penh: Cambodia Programme FFI.
- Hot, Chanthy. 2008. *Conservation Stewards Program Socio-Economic Report O'som Commune, Veal Veng District, Pursat Province*. Phnom Penh: CI.
- Ironside, Jeremy; Hammond, B.; and Hor, L. 2002. *Integrating Production with Conservation: Agriculture and Natural Resource Use in O'Som Commune, Veal Veng District, Pursat Province, Cambodia, 13–24 February 2002*. Phnom Penh: FFI Cambodia Programme and DFW.
- Momberg, F.; and Ken Serey Rotha. 1999. A Needs Assessment for Integrating Wildlife Conservation with Post Conflict Recovery in Phnom Samkos Wildlife Sanctuary (Cardamom Mountains). In *Conservation Status of the Cardamom Mountains in Southwestern Cambodia: Preliminary Studies*, edited by F. Momberg and Hunter Weiler, pp. 41–55. Hanoi: FFI – Indochina Programme.
- Momberg, F.; and Weiler, Hunter, eds. 1999. *Conservation Status of the Cardamom Mountains in Southwestern Cambodia: Preliminary Studies*. Hanoi: FFI – Indochina Programme.

カンボジア国立公文書館資料

- ANC RSC. 364. Récolette du cardamoms (1897–1914).
- . 11529. Rapports des tournées du résident de Pursat effectués dans les régions montagneuses du sud, dans les montagnes des cardamomes et la région des lacs.
- . 11541. Rapport de M. Rousseau, résident de Pursat sur une tournée dans les montagnes des cardamomes.
- . 25729. Ordonnance royales des récoltes de cardamome et de la perception de l'impôt là dessus (1896–1898).
- . 34240. Rousseau, A 1903 *Les pils de la région de Pursat*, Conférence à l'École coloniale de Paris, 26 janvier 1903. Phnom Penh; Imperimerie du protectorat.

仏領インドシナ年鑑

- IEO. 1927a. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 1 (1913–1922). Hanoi: IEO.
- . 1927b. *Annuaire statistique de l'Indochine supplément* vol. 1 (1923–1926). Hanoi: IEO.
- . 1931. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 2 (1923–1929). Hanoi: IEO.
- . 1933. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 4 (1931–1932). Hanoi: IEO.
- . 1935. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 5 (1932–1933). Hanoi: IEO.
- . 1937. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 6 (1934–1935–1936). Hanoi: IEO.
- . 1938. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 7 (1936–1937). Hanoi: IEO.
- . 1939. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 8 (1937–1938). Hanoi: IEO.
- . 1942. *Annuaire statistique de l'Indochine* vol. 9 (1939–1940). Hanoi: IEO.

政府刊行法資料

- Royal Government of Cambodia. 2002. *Forestry Law*. Phnom Penh.